2022 年度卒業論文

五所川原ねぷた祭りの戦後史

弘前大学　教育学部　学校教育教員養成課程
初等中等教育専攻　中学校コース　日本史ゼミナール

19Ｐ1228
佐々木啓祐

目次

はじめに 2

第一章　戦後のねぷた祭りの様子 4

　第一節　経費 4

　第二節　製作 6

　第三節　喧嘩 10

　第四節　ねぷた流し 12

　第五節　運行の特徴 14

　第六節　町内での思い出 17

　第七節　商売 19

第二章　運行団体と題材の変遷 21

第三章　祭りと行政の関わり 26

おわりに 28

参考文献 29

付録 30

はじめに

（1）関心の所在

青森県内の津軽地方を中心に例年７月下旬から８月中旬にかけて開催されるねぶた、ねぷた祭りは、江戸時代から続く伝統行事であり、現在は観光化が進み国内外から観光客の集まるイベントとなっている。これらの祭りは「眠り流し」と呼ばれる行事を起源としているものの、地域ごとに発展してきた歴史が異なる。そして、ねぶた燈籠の形状や囃子、掛け声の違いとして現在の祭りに反映している。

今回対象とする五所川原市のねぷた祭りは現在、市が製作する高さ約 23ｍの大型立佞武多と有志の団体が製作したねぷたが市内を運行している。そして、立佞武多が他の地域には見られない縦長の大きなねぷたであることから、観光客が多く集まる祭りとなっている。しかし、この祭りの形式は明治時代の写真をもとに立佞武多が復活した 1998 年から徐々に形成されたものであり、それまでは地域に根ざした祭りが存在していた。

新型コロナウイルスの感染拡大により祭りの規模が制限されてきた近年、団体の存続をはじめ祭り文化の継承が課題となっている。これを克服するためには、あやふやなイメージや固定観念にとらわれるのではなく、これまで歩んできた歴史を明らかにしていくことが重要であると考える。本研究によって五所川原のねぶた祭りがどのように継承されてきたのか、市民にとってどのような存在であったのかを明らかにすることで、今後の祭り文化の発展につなげていきたい。

なお、祭りの名称に関し青森県内では「ねぶた」と「ねぷた」の両方が使用されているが、五所川原市では広報において「ねぷた」の表記を長く使用しているため、本研究もこれを採用した。

（2）先行研究の知見と分析課題

ねぷた祭りの歴史については青森市と弘前市を中心に研究が行われてきた（2016[1]、2019[2]）。特に青森市では、祭りの起源から現在のねぶたに関わる多様な活動に至るまで言及している。一方、五所川原については成田（2011）[3]が明治期、昭和期、現在の３つの時代区分から変遷を記述しているものの、ここでは昭和 30 年から立佞武多が復活し運行を開始する 1998 年に関してほとんど言及がなく、他地域との比較がないため特徴が記述されていない。また、青森市では戦後の大型ねぶたについて、運行団体、ねぶたの題材が記録されているが、五所川原ではそうした記録がほとんど残されていない。

以上の研究状況を踏まえ、本論文では以下のような分析課題を設定する。

---

[1] 青森市編『青森ねぶた誌　増補版』（2016）

[2] 弘前観光コンベンション協会編『弘前ねぷた本』（2019）

[3] 成田真弓「青森県五所川原市の立佞武多　－民俗行事と観光資源のはざま－」（2010 年度沖縄県立芸術大学音楽学部卒業論文）

第一に、戦後から現在の五所川原のねぷた祭りはどのように変化したかを明らかにする。年代ごとの祭りの差異や共通点をふまえながら変化の要因を分析する。

第二に、五所川原の祭りの特徴を明らかにする。五所川原の祭りに関する記録、情報を他地域の研究と比較することで五所川原の独自性について考察する。

第三の課題は、運行に関する記録、情報の整理である。市史、広報、写真をもとに五所川原の祭りにおける各年の運行団体、作品の題材、受賞対象を明らかにし、傾向の把握につなげる。

以上のような作業を通して、五所川原のねぷた祭りが市民にとってどのような存在であり、どのように受け継がれてきたかを考察する。

（3）研究方法と資料

『五所川原市史』や市の広報を参照したうえで、五所川原のねぷた祭りに関わってきた市民 5 名を対象に聞き取り調査を実施した。調査内容は、主に基本属性（氏名、出生年、ねぷた祭りとの接点)、自身が味わってきたねぷた祭りの印象、ねぷたの製作、町内会や団体での活動である。

聞き取り調査に加えて、数名の市民から 1940 年代から 90 年代にかけての祭りを記録した写真や、団体のパンフレットといった情報提供を受けた。

（4）倫理的配慮

聞き取り調査及び資料提供に協力してくださった市民の氏名については、プライバシーを配慮し匿名での記述とした。

第一章　戦後のねぷた祭りの様子

本章では、聞き取り調査の内容を各資料と関連付けながら、戦後から平成にかけての五所川原のねぷた祭りを見ていく。この分類について、第一節から第三節は市史に準じた一方、第四節から第七節は主に聞き取り調査における共通の話題をもとに構成した。なお、話の内容は忠実に書き起こしたが、本文に記載した部分は意味が理解できるよう語尾の修正や情報の補足を行った。

第一節　経費

ここでは、祭りを行うために必要な経費をどのように確保していたかを見ていく。市史には「ネプタの経費は町内各家からの寄付で賄った。大きな商店からは多額の寄付をもらった」[4]や「目標額を決め寄付を集めてまかなった」[5]とある。また、青森市では「祝儀」という表現で寄付行為について記録している[6]。五所川原では、現在でも各団体が寄付を集めているが、その対象は企業や商店である。こうした傾向は、立佞武多の運行に伴う町内会での参加の減少によって顕著になったようだ。また、経費に伴う団体の運営の変化について、弘前では以下のようなケースが見られている。

> 旧市街地を中心として都市化による町内会離れが起こり、これまで町内会を母体としていたネブタは、特に寄付集めの面で苦しい立場に立たされることになった。しかも観光化のあおりを受けてますます華美になるネブタの費用は増すばかりであった。（中略）人員の確保の面でも危機が訪れた。こうした状況に対応するため、昭和 43 年（1968）の茂森ネプタ愛好会結成を皮切りに「町内」を母体としながらも、基本的な運営は「ネブタ馬鹿」の会員たちが中心となる愛好会形式が次第に主流となっていったのである。[7]

このように、経費を賄うための方法について複数の地域で記録に残っている。その一方で、五所川原の場合は具体的にどのような状況だったのだろうか。市民は以下のように述べている。

O 氏[8]

（製作したねぷたは、今のように）あんな大っきなねぷたでなくて金魚ねぷたです。晩、蚊いっぱいいるから蚊帳吊って竹ひごをロウソクの火で炙って曲げて金魚ねぷた

---

[4] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：672

[5] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：673

[6] 青森市『青森ねぷた誌　増補版』(2016)：231

[7] 弘前観光コンベンション協会『弘前ねぷた本』(2019)：147

[8] 昭和 8 年生まれ。男性。長年、田町・栄町町内会でねぷたの製作や運行に関わってきた。

作ったんです。それを今度町内で引っ張るためにはリヤカーの上に台作って金魚ねぶたを載せ、そのリヤカーの中に賽銭箱を入れて「ロウソク代っこもらいに来たじゃ」って各家庭を回ったんです。そうするとお金ある人は 1 銭とか 2 銭入れる。お金ない人は茶碗に米を入れてその賽銭箱に入れた。
（中略）組ねぶたをうちの方でも作らないといけない。そうなったら誰も作れないわけですよ。（中略）金魚ねぶたは作るけれど（組ねぶたは）難しい。それでどうするかとなった時に「せば、町内会で作るはんで青森から職人呼んで作らせるべし」って青森からねぷた師を連れて、平和町の空き地を借りて小屋をやって作った。町内会でやって作った最初のねぶたですけれども、確かにねぶたはできた。できたけれどもお金払うときになったら赤字。今までの予算の倍も赤字になった。（中略）そしたらその時の赤字で 102、3 万くらいになったんですけれども、タスキを掛けた人が 5 万、10 万払ったんです。それでねぶたその年終わった。次の年から「おら責任負うんだば、出さねじゃ」誰もお金払うの面白くないから、それで町内会のねぶたはやめ。やめになってしまったんです。それからねぶた、町内会で出されないし、「へば、どうすれば良いば」ってなったら「ねぶた愛好会を作るべし。ねぶた愛好会を作って出すべし。それでもし赤字だったら愛好会が払うべし」ということで町内ねぶた愛好会というものを作って始まった。組員が借金すれば自分で払わないといけないからみんな辛抱して作った。余ったお金をねぶた愛好会として積んでおいた。

O 氏は具体的な時期は明言していないが、前半の内容は昭和 20 年代、後半の組ねぶたの製作時期は昭和 30 年代と思われる。各家を回って寄付を集める様子からは、経済的に余裕のない生活の中で少しでも祭りに協力しようとする住民の姿が見えてくる。その一方、積み立てに関しては市史にも記録されており[9]、町内会から愛好会への変化は上記の弘前の事例と共通しているが、O 氏の発言からはその緊迫感が伝わってくる。多大な経済的負担を抱え、町内の結束が一時的に乱れたにもかかわらず存続できたのは、熱意とその思いに賛同する協力者がいたからであろう。

つづいて、以下の 2 人の話から寄付の方法や範囲について見ていく。内容はいずれも昭和 40～50 年代と思われる。

N 氏[10]

その当時は、町内で寄付を集めていて、「町内会でねぷた出すから」ってトータルで 30 万かそのくらいでねぷた出していたんだよ。（中略）町内で何百円ずつとかって出して、そして医者やってる人たちから多くもらったりして。旭町とかはそうだったよ。

---

[9]五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』（1997）：673

[10] 昭和 16 年生まれ。男性。五所川原市観光協会に所属しねぷた祭りに関わってきた経験がある。

（寄付を）もらいに歩くのさ。袋持って。帳面持って、必ずいくらやったとかってさ。

S 氏[11]
町内のねぶたはね、町みんなで楽しむもんだと、そういう考え方があったので、みんな戸別訪問で集金に歩いてましたね。私どもも何回も集金に歩きましたよ。町内会ばかりでなくてよその町内も回りましたね。
私たち柏原町内会に限らず、どこの町内会でもそうしてましたね。各町内でみんな回ってましたよ。私たちは、ねぶたの前になればのし袋 10 枚とか 20 枚とか用意しておくの。ちゃんと 500 円札入れたり 1000 円札入れたり。
ねぶた始まる前に集金の人がちゃんと衣装着て袋持って各店全部回ってきて、それが常識になってるので事前に用意して、札みたいなの、何処何処のねぶたですって、町内の名前書いて領収書代わりに置いていって、それを頂いてのし袋に入れてお渡ししている。何件もね。ねぶた祭り始まる前になれば何十枚も袋準備したね。

集金方法について共通点はあるものの、一家が出す金額には差が見られる。どちらも正確な年代は明らかではないものの、昭和 40 年代だとすれば、当時の金額は現在の約 3 倍になる[12]。そのため、N 氏の町内の場合では 100 万円近い寄付を募っていたということになる。

S 氏の話では、集金の範囲が町外にわたっていたことが特徴的である。話中の通り、こうした行為からは祭りを市民全体で支え楽しむという意識が感じられる。また、第四節で触れる喧嘩のような町どうしの分断や対立とは対照的に、つながりや協力が想起される。集金範囲が町外に及んでしまうと各家や商店は 1 年に複数回寄付を出すことになるため負担が大きくなる。よって、町外からの集金を断ってもおかしくない。それにもかかわらず、多くの市民が賛同していたのは、「町みんなで楽しむもんだと、そういう考え方」が根付いていたからであろう。そしてこうした意識と行動から、祭りは市民にとってなくてはならない存在だったことがうかがえる。

第二節　製作

ここでは、戦後の五所川原のねぶたがどのように製作あるいは調達されていたのかを見ていく。ねぷたの作り手について、市史には「彼らは凧絵も描いた。材料の竹骨を仕込むのは桶屋で、木組には大工が当たった」[13]とあるほか「ネプタは素人が作ったが、各町内

---

[11] 昭和 22 年生まれ。男性。市内で呉服店を営んでいる。

[12] 日本銀行ホームページ　https://www.boj.or.jp/about/education/oshiete/history/j12.htm

[13] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：672

に玄人はだしの腕のいい人がいて専門に製作した」[14]と書かれている。そのうえで、実際に市民はどのように関わってきたのか、以下の話から読み取っていく。

N 氏

我々の頃は、この（ねぷたの）真ん中に生の木が入ってあったの。そして例えば人形の腕でもなんでも胴体でもあれば、また木を接いで中にロウソクが立つように釘いっぱいあった。ここ（真ん中の木）に梯子あるのよ。木の板を打ってあって、中に。我々はここを伝って、ここに手届く所まで、届かないとここにマタギ付けてもらって、ここに足かけて、それでロウソクを刺して。我々が小さい頃は、中のロウソク交換係はそうなの。これは下から手入れて火点けたりして。上からだと熱くてだめなんだ。間隔狭いから。で、ここ（台の上）には必ず旭町の〇〇、題目な。お尻の方には必ず「見送り」。見送りは必ずついてあった。この見送りはさ、優しい絵を描かない。生首の描いた絵とか。

（竹の）青いところだけ残して、ちょっと火であぶって水に浸けると丸く形になるんだよ。割ったままだと 5 ミリか 7 ミリくらいになるの。白いところを削れば 3 ミリくらいだからアールつけるのもうまくいくよ。

（のりは）本当はご飯粒でやれば一番いい。昔はご飯粒。その後は「白玉」って「白玉粉」ってあるんだけれど、その粉を使って水から練ってのりを作って。それは 3 日 4 日経てばすぐカビ生えるんだよ。

鎌谷は、私が実行委員長の時は青森からねぷたを買ってきていたんだよ。青森のを五所川原の台に載せるから、あんまり膨らんでしまって人形の足を切ったりしたんだよ。そうじゃないと合同運行の許可を出せないから。2 人人形の 1 つを買ってくるんだ。

（子どもの頃はねぷたを）作ってあった。我々もう社会人になってからだと、人形師が木造、青森で作ったねぶた、木造から買ってきてた。木造の人形師が五所川原の人形請け負っていた。その人は青森で修行して、青森のねぶたを作ってきて木造の地元に帰って来て、それで作ったから五所川原の 4，5 団体のを作ってた。（中略）我々はみんな警察の許可もらって台車だけ持って行って（ねぶた）積んで帰って来たんだよ。台車はこっちのものだから。歩いて行ったの、木造まで。木造まで歩いて行って、台車引っ張って 15 人、20 人でさ、町内会のメンバーが行って提灯持って車誘導しながら、人形積んでまた帰って来て、持って来てからまた位置を振り替えて、今度額、高欄と作った物はめこんで、ねぶたが一回り大きくなる。

[14] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：675

K 氏[15]

ねぶた師をさ、集会所に泊めて寝泊まりさせて、そうして作ったの。毎年ではないけども。それでも何回かそうしてやって。

（作っていた人は）年いったさオドさまな人で小柄でさ。北川さんだったかな。みんな特徴あるから、うちのおじいちゃんなら「北川さん、ねぷた良いばって腕っこ細くてさ」って。やっぱり頑丈に見せた方が良いんだろうけども、その人の特徴がまたね。

（中略）

いつも何百万もかけてねぶた作らせて、年いった人たちもそれに手伝えなくなってしまったから、旭青会って若い青年部で作るようになったというか、青年部ではいつも買ってきていた。木造から買ってきた。私たちのねぶたはさ、昔の作らせたねぶたは中里に売ってやったの。毎年の恒例になってしまって。良い賞ばっかりもらったんだよ、だから。市長賞とかさ。

O 氏

私たち作れない時、木造に終わったねぶたを買いに行ったんです。1 台いくらしたかというと 20 万円。買ったやつをまたねぶた終わってから小泊で待っててそれを日にちずらして、買ったねぶたを私たちはまた小泊に売ったんです。そして無駄なくねぶたを使ったんですよね。

N 氏は、自身の経験から製作工程を具体的に述べている。材料を考慮すると、時期は昭和 20～30 年代と推測される。現在は、材料に関して既製品をそのまま利用することが多いが、この時期は骨組みとなる竹の加工やのりづくりなど手間が多く、人手や労力を必要としたことがわかる。

その一方、上記の三人の話に共通するのは他地域を対象にしたねぷたの製作依頼、購入であり、市史にも「青森市のねぶた師に頼んだこともあった。また、木造町のネプタをそのまま買うこともあった」[16]とされている。そして、K 氏の話に出てくる「北川さん」は、青森ねぶたの第 2 代名人、北川啓三であり、写真を見る限り昭和 40 年代～50 年代初頭まで旭町のねぷた製作を担当していたようである。

---

[15] 昭和 16 年生まれ。女性。かつて旭町のねぷたに関わっていた。

[16] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：675

写真 1　北川啓三が製作した旭町のねぷた（1973 年）（市民提供）

ねぷたの売買については弘前大学の研究で具体的に述べられている。そこには、五所川原と特に関係の深い木造町（現つがる市）について、昭和 30 年代後半に問題化した祭りの経済的負担を解消するため、ねぷたの近隣市町村への転売が始まり、得意先である五所川原を意識して昭和 40 年代後半から祭りの日程が短縮されたと記されている[17]。ここから、ねぷたの転売は経費を賄うためだということが分かる。一方、前節で触れたように買い手は大きな経済的負担を伴うことになる。五所川原でもこれを解消するため、中里や小泊にさらに転売したと考えられる。製作依頼に関しては、市内にも複数のねぷた製作を請け負う人物がいたようで、T 氏[18]によると 1 シーズンで 5 台以上も製作する場合があったらしい。

[17] 弘前大学人文学部人間行動コース編『人間行動研究 1　ネブタ祭り調査報告書　－文化・社会・行動－』（1986）：8-41

[18] 昭和 39 年生まれ。男性。高校卒業まで五所川原市に住み、ねぷた祭りに関わってきた。

上記の内容の他に N 氏は、ねぷたの高欄の一部である「角（つの）」と呼ばれる部分の形状に特徴があると述べている。一般的に角は、高欄の四隅に上下 2 本ずつ取り付けられる。しかし、五所川原の場合は上下が 1 本にまとまり、ロウの模様と色によって区別している。これは明治末期に撮影されたねぷたでも確認され、現在でも一部の団体で継承されている（写真 2、3）。このような形状になった理由として、N 氏は「中にロウソクを立てるため」としているが、照明としてロウソクを使用していた時代から他地域は上下 2 本だったのに対し、五所川原だけがこの形状になった理由は不明である。

写真 2　1977 年に運行されたねぷた（市民提供）

写真 3　2018 年に運行された幻遊舘のねぷた（筆者撮影）

第三節　喧嘩

ここでは、ねぷたを各町内が自主運行していた時期に発生した町どうしの喧嘩について見ていく。ねぷた祭りにおける喧嘩は、弘前市が最も激しかったのに対し青森市ではほとんど起こらなかったらしい。市史には「前晩に喧嘩をして、翌日に喧嘩相手に会ってもお

互いに何もなかったかのようにふるまっていた」[19]や「喧嘩するにも互いに節度があった」[20]とあることから、ねぷた運行における喧嘩は一種のパフォーマンスの要素を含んでいたと考えられる。また、「互いの進路を巡って」[21]始まり、あくまでもねぷた本体を破壊することに留まり、「敵対する相手の生命を奪うことなく収束させる」[22]ということでは、弘前の事例と共通する。喧嘩が行われていた時期について、市史には昭和27年頃までと記録されている[23]。

ここからは、五所川原のねぷたにおける喧嘩の様子を具体的に見ていく。

N氏

（違う町内のねぶたと）ぶつかることあれば喧嘩。なぜかというと、五所川原のねぶたは攻めねぶただから、下がることしない。（中略）どっちかが譲れば良いけど譲らないのよ、お互いに。だから喧嘩になって、人形を燃やしたり胴体を燃やしたりしたの。これが自主運行の時に（喧嘩が）起きた原因。喧嘩ねぶたの始まり。

（石を投げ合っていたのは）大正時代だと思う。明治の終わりから大正時代。まだ許可制が、合同運行になってないから。合同運行になってからそういうことほとんどないから。やっても、喧嘩はしょっちゅうしてあったけどな。それは酒飲んだ勢いの、そういう関係。小さいとき小学校の頃は、自主運行。合同運行ではないと思う。ただ、金太郎の胴巻き、腹巻きに親とかジサマに石ころいっぱい詰められたの分かってあったの。今の本町あるでしょ。青銀の前はこんな大きい川だったんだよ。ふたも何もしてない。だから前を通れば喧嘩すれば、あの川に全部投げられた、ぼちゃぼちゃと落ちたもんだよ。我々小さい頃のねぶたの意識はそういうのだ。それから今の火消し棒ってさ、竹にいっぱいこう付けて、洗面のたらいに水いっぱい入れて、これを逆さまにしてつけておいて。それで燃えればすぐ（棒を）ひっくり返してビューって（水をかけて）やって、そして消してあったよ。

O氏

その当時、戦後ですけれどもその当時は喧嘩ねぶたって、もちろん交通規制も何もないわけですよね。そうすると下平井町のねぶたと田町・栄町のねぶたが道路で行き会うわけです。行き会うから「おめだぢ、そっちさよれじゃ」そうすれば「おら先に来

---

[19] 五所川原市『五所川原市史　史料編３　下巻』(1997)：674

[20] 五所川原市『五所川原市史　史料編３　下巻』(1997)：679

[21] 小山隆秀「伝統の希求と創出：青森県津軽地方のねぷた喧嘩習俗を事例として」(『国立歴史民俗博物館研究報告』205、2017年)：219

[22] 脚注21

[23] 五所川原市『五所川原市史　史料編３　下巻』(1997)：679

たもの。なして寄ねばまいんだば」という簡単なことから喧嘩が始まった。その時大人は子供たちを「今喧嘩始まるはんでねぷたから離れれ」って、ずっと離してしまって始まるんです。それで本当に喧嘩するんですよ。どうやるかというと、その当時は左官はコテを腰に差して大工はノミを懐に入れてる。マサ葺き、屋根をトタンでなくてマサを敷くんですよね。そのマサ葺きの職人は金槌持ってる。怪我すればだめだからねぷたから離してしまって、屋根葺きの金槌というのはこういう棒の先に四角いやつこう付いてるんですよ。屋根のトタンを打つわけですけれどマサを打つわけですのでね。それほど大きな金槌でない。それで喧嘩が始まるんですよ。みんなが喧嘩するのではなくて代表者が喧嘩するんです。俺たちは5人も10人もで喧嘩すると思ったら代表者が、代表者というのは喧嘩好きな人もいるわけですよね。「どしたってや」「なしたってや」「せや、どうすんずや。この馬鹿者」とたったそれだけの話。それほど喧嘩を強くやらない。鼻血流すとかまではやらないんですよ。大概1分か2分なれば主だった人が「まあまあ、まあまあ。やめれじゃ。ここはおらほ譲るべし」って仲良くして交代に行く。そういう喧嘩ねぶたであった。

2人が経験した喧嘩は、どちらも戦後間もない昭和20年代の頃と思われるが、注目する視点は異なっている。N氏は喧嘩によって変化するねぷた本体に注目している。ねぷたを壊すことが特に印象に残っているようだ。そして、ねぷたが燃えたことから照明がロウソク、骨組みは竹であることがわかる。一方、O氏は喧嘩による人の動きに言及している。喧嘩の際に持つ道具や罵声、子供を避難させる様子からは緊張感が伝わってくる一方、仲裁によって被害は小さく収まっているように読み取れる。このことから前述した通り、喧嘩には暗黙の了解があったことがわかる。

このように両者の話には違いがみられ、全く異なった体験をしているようにも感じられる。しかし、N氏が語ったねぷたを壊すことに関し、O氏の話においてもねぷたから子供を離していることから、喧嘩における一つの目的として共通している可能性がある。

第四節　ねぷた流し

かつてのねぷた祭りは、「眠り流し」と呼ばれる民俗行事の名残として、祭りの最終日（ナヌカ日、ナノカ日）は昼間に運行した後、ねぷたを川や海に流す風習があった。弘前市では「ねぷたの骨に貼ってある紙を破り取り、水で骨を洗った」[24]とされている。

最終日の昼間の運行は、五所川原では立佞武多の運行に伴い行われなくなったが、青森市や弘前市では現在でも続いている。しかし、ねぷた流しは時代が下るにつれどの地域でも徐々に行われなくなった。その理由として、河川法に伴う警察の取り締まりや、材料の変化、他地域への売却が考えられる。青森市では「川や海の汚染とか危険であるとの理由

[24] 弘前観光コンベンション協会『弘前ねぷた本』(2019)：158

で戦後から行われなくなり、それに代わる形で行われたのがナヌカビの晩の海上運行」[25]だとされており、1964 年に復元する形でねぷた流しが行われた。五所川原のねぷた流しに関する最も新しい記録は 1962 年で、「七日の最終日は（中略）午後二時過ぎに岩木川に流し」[26]たとされている。しかし、1966 年のナヌカ日にねぷたが橋を渡る様子が写真に残されており（写真 4)、この風習が途絶えた明確な時期は不明である。

ねぷた流しを実際に経験した市民は以下のように語っている。

N 氏

ナヌカ日になれば、橋の上から順番に人形をちぎって投げて、今は針金だからちぎられない。ペンチ持って行ったりしないとだめだけど、あの当時は竹だから。（ねぶたは）流して良かったの。今は河川敷法でものを川に流してはだめでしょ。それが始まってから流したことをやらなくなったの。最後に今のねぶた流しの歌を歌って帰って来たんだけど、その台には木の枠だけあって、その真ん中に面をぶら下げるの。この面だけは流さなかったんだよ。それを持って町内の広場で面を飾ってお酒を飲んだわけ。（ねぶたを流すときは）壊すか折るか、ナタとかで木の台とかあれば、そこで切ったり折ったりして。例えば障子 1 枚くらいの形になったら、そのまま流して良かったんだよ。本来はねぶた流し（は)、灯籠流しが起源でなったんだろうな。

O 氏

私たち、ねぶたやった時は 4、5、6 と晩に引っ張るわけですけれどナヌカ日には朝 8 時から出てお昼に終わるわけです。じゃあそのナヌカ日に何するかというとねぶた流しというものをやったんです。ねぶた流しが何かというと、昼に岩木川の乾橋の上に行ってねぶたの面の紙を 2 枚か 3 枚剥いで「ありがとうございました」と川に流した。ですから、その当時からねぶたは神様の代わりみたいに五穀豊穣を願い、家内安全を願い、商売繁盛を願い、悪魔退散、そういう願いをみんな込めてねぶたを作って引っ張ったわけですよね。ですから、運行が無事にできたことはねぷたのおかげであったということで最後にはねぶた流しで川に流した。それで終わりにしたんですよ。その時も「払え給え、清め給え」ということを祝詞上げてお礼としていたんですよね。

N 氏の話は、市史の「岩木川の河原に行って持っていって流した。（中略）流すときは水に入れてこわしてしまうが、ネプタの面（頭部）だけは持って帰った」[27]という記録と共通しているが、O 氏によれば面の紙を剥いで流しており、その扱い方は対照的である。こ

---

[25] 青森市『青森ねぶた誌　増補版』(2016)：149，150

[26] 五所川原市役所「五所川原市広報」(1962 年 8 月 20 日付)：2

[27] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：677

のようなねぶた流しの方法の違いには研究の余地があるが、ねぶたの面が祭りにおいて特別な意味を持っていたことは確かである。

また、O 氏の話からは田町・栄町町内会ではねぶた流しにおける儀式的な側面を重要視していたことがわかる。そして「ネプタを出す最初の日に、小屋の前に供え物をした」[28]という記録があることから、かつてはねぶたを神聖なものとして扱っていたことが読み取れる。現在の祭りは観光化とともに観客の視線を重要視する傾向がある。しかし、O 氏の言うようにねぶた流しを含む儀式的側面は、参加者が願いや感謝の思いを込める機会となっており、祭りの必要性を当事者が再確認する意味があったように思われる。

写真 4　乾橋を渡るねぶた（1966 年）（市民提供）

第五節　運行の特徴

ここでは、五所川原の祭りにおける運行の特徴に注目する。まず、参加者の中の踊り手の特徴について次のように語っている。

N 氏

ハネトって形はない。五所川原のねぶたは。手踊り。昔は町内で盆踊りをやって、1 歩進めば 2 歩下がるような踊りであったの。それで五所川原のねぶたはとろいって言われた。

K 氏

白生会、中村整形、その辺からみんな女の人出たんだ。それで足りなくて、漆川から 10 人くらいは借りてきたんでないかな。一日一晩 5000 円かけて。その頃、ちょうどうちのおじいちゃんが町内会長やったり三役やっていたから、いろんなの借りてきて 3 日出たね。ナノカ日だって、今お昼何もやらないでしょ。その頃ナノカ日ってすれ

[28] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：672

ば 8 時、10 時頃から集まって昼ずっと跳ねて。回る距離も結構あったしさ。前は、元の市役所の方あまり通らないで大町ずっと通ってさ。

O 氏
（手踊りは）戦前からあったんですよ。結局、ねぷた引っ張るのは子ども引っ張るんです。子どもを見守るのは親ですよね。母親ですよね。母親は手ぶらでないとだめでしょ。引っ張ることも何もない。それで手踊りやった。ずっと続いた。

上記の内容からわかるように、N 氏は五所川原におけるハネトの存在に否定的であり、3 人が共通して手踊りについて言及している。写真によれば、戦後のどの年代においても手踊りが登場していることから、五所川原で絶えず受け継がれていることがわかる。

手踊りの衣装の特徴である花笠と浴衣は青森市のハネトと非常に似ているが、隊列を組んで決められた振り付けをする点は明らかに異なっている。写真 5 によると、このように統一した衣装の手踊り隊は縦に約 20 人、3 列に渡って踊っている。これに加えて参加者の中には台車の引き手や囃子がつくことから、当時は規模が 100 人近い大きな団体が存在したことが予想される。そして、ねぷた本体とは別に観客を圧倒するような参加者の華やかさが伝わってくる。

その一方で、市史にはハネトに関する記述がある。「ハネトは若者や小学校低学年くらいの子供達であった」[29]ということから、その様子は写真 6 のようだったと思われる。写真では、このような参加者は 1970 年代以前には確認できていない。そのため、時代が下るにつれ徐々に増加しているようだ。そして、以上のことを踏まえると、手踊りとハネトが混在していた時期があったことが読み取れる。

写真 5　五所川原青年会議所の手踊り隊（1973 年）（市民提供）

[29] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：678

写真 6　ハネトの様子（五所川原市広報　1996 年 8 月 15 日）

祭りに参加する子供たちについて、N 氏は次のように語っている。

> 昔はねぷたの台車に子ども載せたもんだよ。小さい子ども。台車の横に並んで載せたのよ。それで親が回りを歩いていたの。（台車に）子どもが座って足だけ下ろして、何人も座ってぐるっとこうやって。5、6 歳まではみんな座ったのでないか。みんな、そういうスペース作ってくれるんだよ。（写真 7）

写真 7 や N 氏の証言からは、無条件で子供たちを受け容れる祭りのおおらかな雰囲気が伝わってくる。その一方、N 氏は子供たちの役割について以下のように語っている。

> 完全に今の台車式になってから、我々ロウソク交換に台車に上ってうんと交換に歩いたもんだよ、運行中にな。ロウソクの火、消えてしまえば。子どもで体小さいから上半身裸でロウソク交換に行くんだよ。すれば、ロウソクのロウが垂れて体やけどしたり、そういうのいっぱいあったんだよ。

ねぷたの中のロウソク交換は身体が小さくないとできないため、子供たちの役割になったことが推測される。大人が見守る中、子供たちがねぷたの様子を注意深く見て、火が消えそうだったら交換していたのだろう。また、市史には「運行時のネプタの中にはロウソクを取り替える係がいた。たいてい大人一人に子供二～三人であったが、暑くて大変な仕事であった。」[30]とあるが、その大変さとは、ねぷたの中にこもった熱気の中で動くことや上半身裸でやけどを負うというものであったことがわかる。

---

[30] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：676

写真 7　ねぷたを囲むように子供たちが台車に座る様子（1970 年）（市民提供）

つづいて、囃子方の動員について、O 氏は以下のように語っている。

> 私たちは囃子できる人たちを、ねぷた囃子ない時頼んできて、浅井で登山囃子の組があるんですよ。だから、そこから人を借りてきてねぷた囃子に代わって。だからねぷた囃子でなく登山囃子やって。昔からあったんだ、登山囃子と獅子舞は。ずっと前から頼んできているみたい。

この発言は「ネプタの囃し方は主に町内の人であったが、在方から応援を頼むこともあった」[31]という記述と重なる。五所川原の囃子については「北側が伝統を保ったのに対し、南側は昭和二十年代までは伝統的であったが三十年代始めにほとんど絶えてしまった」[32]とあり、O 氏が所属する田町・栄町町内会は南側に当たる。このことから、在方との協力が伝統の存続に大きく関わっていたと考えられる。

第六節　町内での思い出

聞き取り調査をする中で市民が語ることの多かった町内での思い出について、ここにまとめる。

N 氏

大人は酒飲むとき、身欠きニシンとキュウリの漬物だよ。決まってるんだ、これも。酒のつまみな。ニシンには味噌つけて。それを祭り終わればみんなで集まって、大人

---

[31] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：672

[32] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：678

は酒飲んで、あの時日本酒とかビールとかは何も飲んでないの。（祭りの）スタートの時は、コップ 1 杯ガーッと飲んで出るの。勢い付けないとだめなんだから、大人はな。
（中略）おじいちゃんがいつも町内のねぶたに行っていたから。ねぶたが好きなのか酒飲むのが好きなのか分からないけれどね。（酒飲みに来るのは）みんなねぶたの協力者なんだよ。だから、自分で飲む酒を自分で持って行けば、他の人にも飲ませる。そういう集まりになってしまえば、ねぶたの仲間意識が強いわけでしょ。町内の交流がもっともっと増すわけでしょ。あ金ある人、お医者さんやってれば、「私行けないけど頑張って下さい」とお金出してくれるし。昔はおにぎり握ってゴマ付けて、中にサケとかマスとか入れて、決まってるんだよ。子供たちは、それとお菓子もらうのが面白くてねぶたに来て。

K 氏
（おにぎり作るとき）手真っ赤になってさ。あっつい炊きたてやるんだもん。そうすれば、あっついから水つけて塩つけて握るじゃん。そうすれば先頭でやってる年いったバサマたち、「よげ水つければまね。飯割れでまるはんで」って（言われて）。だから「塩で塩で」ってさ、（手に）くっつかないようにするには塩つけてやればいいって。そうして怒られてやっていたよ。昼間おにぎり作りに行って、晩になればねぶたに出るんだもの。肩凝ってしまってさ。緊張するのと、おにぎり何百個って握るもんだから。一人ではないけれどみんな丸くなって茶碗に入れて「はい！」って渡して。そうして握ってたから握って楽しかったんだよ。終われば近所に肩もみしてもらうくらい肩凝っていた。そういう集まりがないと世間も知らないし、年いった人バサマたちの中に入ってさ握ってさ。旭町はおにぎりも美味しかったし、それにきゅうりの 1 本漬け。だから、他のねぶたに出ててもここに着いてお菓子渡すってなればそっちからガーッと（集まってきた）。本当に旭町はさ、支度したよりもあまりにもたくさん出るから最後あたりはさリボン渡したの。リボンと引き換えにやるようにしたの。綱引っ張っている子供たちから順番にリボン渡して。お菓子の袋詰めも 500 個くらいは作ったんじゃないかな。楽しかったよ。終わってしまえばテント張った下にブルーシート敷いて大人の人たち酒飲んで。

O 氏
何が楽しいかというとねぶた引っ張った後、大っきなおにぎり 2 つとキュウリの漬物 1 つ。その当時、もの食べるものがないんですよ、みんな貧乏で。ですから子供たちはそのおにぎりをその場で食べないで家に持って行って食べる。そういう時代だったんですよね。

市民の語る内容には様々な具体的体験が含まれているが、特にこの部分には五感を刺激する体験がいくつも含まれている。食べ物の味や匂い、おにぎりを握る時の熱さ、町内の人たちが集まったときの話し声などである。祭りといえば市内運行のイメージが強いが、人々の感覚を刺激する体験は祭りの一部として記憶に残っていることがわかる。

K 氏が語った経験について、青森市でも同様の内容が言及されているが[33]、そこには女性の役割にくわえコミュニティを形成する祭りの役割が読み取れる。K 氏は町の年長者に怒られながら関わった祭りの準備を楽しかった経験として語っているが、こうした感情の背景には女性特有の事情があると考えられる。「そういう集まりがないと世間も知らない」と言うように、地域との日常的なつながりが少なかった専業主婦にとって、ねぷたに関わる活動は社会性を育む貴重な機会となっていた。そして、「バサマ」たちから教えてもらいながらコミュニティの一員として認められ祭りを通じて町に貢献できることが、やりがいであり楽しみになっていたのだろう。

上記の 3 人の証言に共通するのは食事だが、食べ物の種類まで一致しているのは興味深い。また、町内会で準備したお菓子の袋詰めの量からは当時の子供たちの多さがうかがえる。現在も祭りの直前に団体ごとに食事を取ることはあるが、町内ごとに手作りで準備することや食べ物の種類が決まっていることはほとんど見られなくなったように感じられる。

第七節　商売

ここでは、祭りと商売の関わりについて見ていく。S 氏は市内中心部で呉服店を営んでいることから次のように語っている。なお、この内容は筆者の質問に答える形で話していただいた。

> 先代が町内会長やっていて、その時代はずいぶんねぷた出して町内会としてねぷた出して、みんなで交流ありましたね。当時は私たち商売柄、町内会の名前入った揃いの浴衣を注文してもらいましたね。
>
> Q：五所川原では（注文を受けたのは）ここだけだったんですか。
>
> その頃はもっと中三さん、丸友さん、マルキさん、みんな同じ商売ですからみんな競争で浴衣作ってましたね。うちだけじゃないです。今残ってるのはうちだけですけれども。皆さん競争して安く良い物を、という商売をしていましたね。だいたい町内会で 30 枚とか 50 枚とかお揃いで作るわけね。名前入れてね。私どもは柏原町内会だから地元だからマルキさんと交互に注文もらったりね。あと、私たち注文たくさん受けたのは平井町。平井町の注文たくさん受けましたね。当然本町さんあたりは中三さんに行ったと思うしね。寺町は、ナリさんとかサンゼンさんとか。地元でみんな、町内会に入っている呉服屋みんな当然注文受けますよね。錦町さんももらいましたよ。
>
> Q 規模はどんな感じだったんですか。

---

[33] 青森市『青森ねぷた誌　増補版』(2016)：232

規模はやっぱり平井町が大きかったですよ。ただの平井町から始まって、上平井町、中平井町、下平井町までね。多かったですね、平井町さんがね。一回作れば 3 年、5 年とか使いましたからね。

Q それに付随する物とかも売っていたんですか。

もちろんですよ。別染めの、別あつらえの浴衣、それに付随する帯とかね、花笠とかね、おこしとかたすきとか、当然一式ですね。

Q 町内の半纏とかもですか。

当時は半纏はあんまりなかったですね。半纏はあんまり作らなかったですよ。よくお子さんが半纏着ていましたけれど、既製品の半纏でしたね。お子さんは半纏着なくても、普段の、私たちの若い時代はさ、浴衣は毎年作ってもらったの。今は一生に一枚とかでしょ。昔はしょっちゅう浴衣着ていたんですよ。浴衣に限らず普段のかせりでもプールでもしょっちゅう着物着ていたもので、着れば消耗するでしょ。着れば洗うしね、洗えば消耗します。そうすれば消耗すればまた作ると。

Q 祭り当日はどんな感じだったんですか。

祭り当日は店は休みません。昔は休みほとんどなかったんですよ。今でこそ週 1 で休んでますが。年間 4、50 日休んでますが。昔は年間 2、3 回しか休みなかったですね。それだけ従業員がたくさんいたので、交代して店を開けられたんですね。今は頭数少ないから交代要員がいないから店閉める必要あるね。

Q 立佞武多になってからは、商売的に変わりましたか。

（浴衣などの注文は）全然ないのと同じですね。今はネットで注文したりね、地元から買わない人が多いですね。私たちもたまに別染めやってますけれども、ほんのたまにです。若い人は浴衣でも半纏でも買い物の仕方が変わってしまって。

市内の商店が祭りを前に互いに競い合っていた一方、各町内会からの注文が市内の複数の商店に分散されていたことが興味深い。その背景には、店と市民の距離の近さがあると考えられる。インタビューに登場する「中三」、「丸友」、「マルキ飛島」の 3 つのデパートは市内中心部に 1960 年代から 70 年代にかけて開店した。多くの市民はこれらを利用するなかで店との信頼関係を築き、衣料品店は普段から浴衣が一定の需要を保っていたことで祭りに際した注文に対応できた。しかし、自動車の普及に伴い郊外に大型ショッピングセンターが建設されたことで、先述したデパートは 1995 年～2006 年にかけて閉店することになった。これは立佞武多によって祭りが観光化し始めた時期に重なる。このようなライフスタイルの変化から祭りと市民を結ぶ市内中心部の商店の役割は弱まっていったようだ。このような状況を踏まえると、市内中心部の商店やデパートが連携して市民の需要の受け皿となり祭りを支える関係は、1970 年代から 90 年代の特徴だと言える。

第二章　運行団体と題材の変遷

ここでは、各年の運行団体と題材から祭りの変遷を見ていく。まず運行団体の傾向について、これまでは「農家の多い町は出さなかった」[34]や「中心部に位置する町においてのみねぶたが作られている」[35]とされてきた。前章で述べた製作における職人の必要性や経済的側面を考えるとこれらの内容は間違っていないように思われる。しかし、裏付けが個人の記憶や大正期の史料であり、戦後の様子を正確に反映していない可能性がある。そのため、ここからはより具体的な資料から紐解くこととする。以下の表は、市民から提供された写真や、市史、広報から収集したデータのうち特に参加記録が多く残っている年の記録を並べたものである。

1955（昭和 30）年（市）[36]

題材	団体名
加藤清正	田町
千代萩荒〇子男之助	川端町
畠山重忠、巴御前	東町
源義経	敷島町
自雷也	平井町
大石良雄	幾島町
曾我兄弟	元町
日本武尊	布屋町
里見八犬伝	弥生町
三国志	飯詰
曽我五郎	旭町
曽我五郎と五所五郎丸	柏原町
牛若丸と弁慶	寺町
牛若丸と弁慶	日通

1970（昭和 45）年

鍾馗と鬼	旭町
龍王と金剛力士	川端町子供会

[34] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：673

[35] 成田真弓「青森県五所川原市の立佞武多　－民俗行事と観光資源のはざま－」(2010 年度沖縄県立芸術大学音楽学部卒業論文)：26

[36] 各情報の引用元に関し、(市) は『五所川原市史　通史編 2』(1998)、(広) は広報を指している。このほかについては、市民から提供された写真によるものである。

坂田公時と源頼光（推定）	上平井町
碇知盛	下平井町
素戔嗚尊の大蛇退治	新町
児雷也（推定）	田町・栄町
曽我の五郎と御所の五郎丸	布屋町
草薙の剣	松島連合町内会
茨木	五所川原青年会議所
加藤清正	不明
山姥と公時	不明
大森彦七と千早姫	不明
武松（推定）	不明
清原武衡	不明

1977（昭和 52）年

紅葉狩	新町
加藤清正	田町・栄町
三国志　磐河の戦い	旭町
大江山	川端町
岩見重太郎狒々退治	敷島町
蝦夷征伐	寺町・岩木町
金剛力士	平和町
風雲児信長	上平井町
足柄山の金太郎	もつけ
大蛇退治	大町
勧進帳	東芝
岩見重太郎狒々退治	不明
一寸法師	中平井町・平井町ねぷた愛好会

1985（昭和 60）年

草薙剣	日立東部セミコンダクタ(株)津軽工場
妖怪　戸隠山	上平井町
那智の瀧	下平井町
山田長政	田町・栄町
長尾新六定景と公暁	旭町
三国志　仙人と孫策	敷島町

水滸伝	元町
鬼若丸と信濃坊	末広・新宮町
素戔嗚尊大蛇退治	市職員互助会
金剛力士	もつけ
（担ぎ扇ねぷた）	三振り会

1997（平成 9）年（広）

木曽義仲の出陣	日立東部セミコンダクタ(株)津軽工場
平成の国取り	下平井町
海幸彦、山幸彦	三振り会
鬼人のお松	若葉四町内住民連絡協議会
平景清	田町・栄町
村上義光　錦旗奪還の図	敷島町
風神雷神	市職員互助会
魯智深　五台山を揺がす	元町
怪力朝比奈三朗	旭町

これを見ると、1950 年代から 90 年代の運行団体は一貫して町内会単位が多いことが分かる。また、企業の参加は戦後の早い時期から見られる。市史によると「昭和三十年代後半から企業のネプタが参加するようになった。最初は電報電話局や郵便局などの半公的機関で参加した」[37]とある。半公的機関の参加については、現時点で単独で祭りに参加した記録はない。これはおそらく写真 8 のように、機関が立地する町内の一員として参加したということだろう。表から読み取れる大きな変化としては、70 年代後半から 80 年代にかけての有志の団体の結成が挙げられる。多くの団体がねぷた製作を周辺地域や特定の制作者に依頼する中で、製作から運行まで自前で行ったのが「三振り会」と「もつけ」のようだ。また、これらの団体は特定の町内会や企業の枠にこだわっていないことが特徴的であり、現在の五所川原における祭りの参加形式に大きく影響していると考えられる。

[37] 五所川原市『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)：676

写真 8　上平井町のねぷた（1983 年）（市民提供）

ねぷたの題材について、市史には「製作者（リーダー）が決めるが、三国志、歌舞伎、歴史上の武者など勇ましいものが選ばれた」[38]とあるが、実際の記録や資料をもとに確認すると青森ねぷたに準じていることが多く、構図の模倣も見られる（写真 9、10）。ただし、これらのねぷたの中には他地域から購入したものが含まれるため、五所川原に限った傾向ではない。五所川原のねぷたの変遷について、『公式ガイド』[39]では、大正期を取り上げ「ネプタが小さくなればなったなりに、台座、高欄等により細かな趣向を施し、人形に迫力を加え、見送り絵に風雅を際立たせる」と書かれているが、戦後になると人形部分の製作は外部に依存し町内での工夫の範疇から外れていったと考えられる。

写真 9　末広・新宮町のねぷた（1984 年）（市民提供）

---

[38] 五所川原市『五所川原市史　史料編３　下巻』（1997）：675，676

[39] 立佞武多を広く知ってもらう会『立佞武多　2010 公式ガイド』（2010）：6

写真 10　青森市職員互助会のねぶた（1981 年）（青森ねぶたミュージアムから引用）

第三章　祭りと行政の関わり

ここでは市史と広報をもとに、戦後の行政がどのようにねぷた祭りを推し進めていたのかを見ていく。広報の調査対象は 1955～1997 年にかけての 7、８月号とした。

まず、祭りの主催に関して次のような記録がある。

> かつてのネプタは主催が明確でなく町内単位で行っていた。五所川原に商工会が設立されたときに「夏祭り」を主催し、この中にネプタが位置付けられるようになった。（中略）その後、北津軽郡商工会議所が設立され、「夏祭り」は移管された。さらに五所川原市商工会議所になってこれを受け継いだ。この頃（昭和二十九年～三十二年）になって市から補助金が出され、ネプタに報奨金を授与するようになった。[40]

また、広報によると「旧七月七日を中心に五所川原商工会議所主催、市役所後援で『五所川原まつり』が開催されて」[41]いる。つまり、戦後のねぷた祭りは複数の夏祭り行事の１つとして位置づけられていた。このような祭りの方法は他地域にも見られ、盆の時期に多く開催されている[42]。町内運行に関しては、1956 年の祭り日程に各町内の運行日が指定されているが、1962 年以降確認できない。

1984 年からは市民を対象にしたねぷた囃子無料講習会が開かれるようになった。この活動は「従来何種類もあった五所川原のねぷたばやしを『五所川原本来のねぷたばやし』に統一しようという気運」[43]が高まったことがきっかけとされている。1990 年には、市役所職員互助会のねぷた製作への参加を市民に呼びかけており、1992 年にも同様の記事が見られる。いずれの活動も市が窓口となっていることから 1980～90 年代は行政がねぷた祭りを積極的に後押しする傾向があったと推測する。このような動きはそ

時代区分	年（昭和）	祭り・年中行事の記事数	記事の特徴
混迷期	24	21	・経済的理由から祭りの存続が難しくなっている（八戸えんぶりの簡素化，弘前観桜会で有料化案，など）。 ・中断されていた祭りの復活（黒石稲荷神社神輿渡御，弘前市山車祭り，など）。
転換期	30	60	・相次ぐ祭りのとりやめ，簡素化（青森を中止した費用で消火用貯水池の設置など）。
	35	82	・青森ネプタの全国ＰＲがはじまる（東京へネプタ祭りのキャラバン隊派遣，ＳＫＤによるネプタのレビュー化，など）。
上昇期～安定期	40	73	・郷土芸郷が全国に注目される（中里町なにもささ踊りが全国民謡大会に出演，など）。 ・伝統行事が衰退している（八戸のえんぶり組は 37 年 40 組，38 年 35 組，39 年 33 組，40 年 28 組と減少の一途を辿っている，など）。
	45	96	・行政主導型のイベント祭りが注目される（各地の夏まつり，秋の農業祭，など）。
暗転期	48	95	・伝統芸能の発表会や，復活が注目される。
反転期	50	145	・後継者不足から途絶えていた民俗行事や芸能が復活される（神楽，メ縄奉納，弥生画，小正月のマユ玉，まける日，など）。
	59	181	・観光や行楽を目的とした企画祭りの創設（十和田秋まつり，レッツウォーク和山参詣，りんご灯まつり，など）。 ・伝統行事や芸能が学校教育にとり入れられる（中学生が裸参り，運動会で綱踊り，など）。

表１　『東奥日報』紙にみる祭りと年中行事

---

[40] 五所川原市『五所川原市史　史料編３　下巻』(1997)：675

[41] 五所川原市「五所川原市広報」(1955 年 8 月 15 日付)：2

[42] 弘前大学人文学部人間行動コース編『人間行動研究１　ネブタ祭り調査報告書　－文化・社会・行動－』(1986)：10

[43] 五所川原市「広報ごしょがわら」(1986 年 8 月 1 日付)：3

れまでの他地域依存からの脱却を意味していると考えられるが、その背景には何があるのだろうか。これを探るうえで興味深い記録がある。表 1 は、青森県の地方紙である『東奥日報』の戦後における県内の祭りや年中行事の取り上げ方について、弘前大学がまとめたものであり[44]、内容の特徴をもとに時代区分が示されている。ここで注目したいのが「反転期」であり、県内の行事がおおよそ好転していることがうかがえる。そしてこれは、五所川原の祭りにおいて有志団体が結成され始め、行政の取り組みが変化した時期の一部と重なる。このことから、県内の祭りの傾向とともに五所川原の祭りが変化したと考えられる。

[44] 弘前大学人文学部人間行動コース編『人間行動研究 1　ネブタ祭り調査報告書　－文化・社会・行動－』(1986)：48

おわりに

これまでの内容を五所川原の祭りの変遷と特徴の観点からまとめると以下のようになる。

五所川原のねぷた祭りは昭和から平成初期にかけて町内会ごとに製作、運行しており経費は主に各家々や商店からの寄付で賄われた。自由運行の頃は、ねぷたが道で鉢合わせになると喧嘩がしばしば発生したが、昭和 30 年頃、商工会議所が主催する夏祭りの一部に位置づけられるとしだいに日時や運行コースが統一されていった。それとともに製作や囃子はしだいに周辺地域に依存するようになる。特にねぷたの人形部分の製作に関しては、自主製作が減少した一方、特定の製作者への依頼や他地域の中古品を購入が増加した。運行団体は長い間、大半を占める町内会のほかに企業が毎年数団体参加していたが、1970～80 年代にかけて有志団体が参加し始めた。その影響を受けてか、80 年代に入るとそれまでの他地域への依存からの脱却が図られ、市はこれを後押しするようになる。

他地域のねぷた祭りには見られない五所川原の特徴には、手踊りや高欄の形態が挙げられる。戦後、祭りの様々な側面が他地域から影響を受ける中、これらの要素は市民が中心となって手がけたことで継承されたと考えられる。

本研究は、聞き取り調査や写真資料によって戦後の祭りのより具体的な部分に迫ることができた。そして、これまで明らかにされていなかった運行団体やねぷたの題材を体系化することで、年代ごとの傾向やねぷた本体の造形的な変化の把握につながった。しかし、聞き取り調査の内容は断片的で対象者も限られているため、変遷の要因を明確にできなかった。また、運行団体と題材の記録に関し、各年の総数を考慮すると資料から判別した数は半分に満たない。五所川原のねぷた祭りの歴史については、青森市や弘前市と比較すると先行研究や史資料が少なく、依然として明らかになっていない部分が多い。今後もさらに幅広い史資料に触れることで五所川原における祭りの歩みを詳らかにしていきたい。

本研究における聞き取り調査では、分析課題の枠に収まらないような様々な思いや意見に触れることができた。調査にうかがい「昔の祭りの話を聞きたい」と言うと、どの方も自分から思い出を生き生きと語ってくれた。それぞれの体験に感情が込められるその話しぶりからは、祭りを愛し楽しんでいたことが伝わってきた。その一方、現在のねぷた祭りに対してはネガティブな印象や意見が多く聞かれ、観光化の裏で市民の心が祭りから離れる不安を感じた。しかし、ある人の「コロナの影響でここ数年、私たちの団体はで参加できず、もどかしかった。でも来年こそは必ず出る」と意気込みからわかるように、祭りが市民にとってなくてはならない存在であることは確かである。これからも市民が誇りを持ち、語り継いでいきたいと思える祭りにしたいものである。

参考文献

・青森市『青森ねぶた誌　増補版』(2016)
・五所川原市編『五所川原市史　史料編 3　下巻』(1997)
・五所川原市編『五所川原市史　通史編 2』(1998)
・五所川原市「五所川原市広報」(1955～97)
・立佞武多を広く知ってもらう会『2010 公式ガイド　立佞武多』アート印刷（2010）
・弘前観光コンベンション協会『弘前ねぷた本』(2019)
・弘前大学人文学部人間行動コース『人間行動研究 1　ネブタ祭り調査報告書　－文化・社会・行動－』(1986)
・青森ねぶたミュージアム　https://nebuta-museum.com/　（最終閲覧日：2023 年 1 月 18 日）
・日本銀行ホームページ　https://www.boj.or.jp/about/education/oshiete/history/j12.htm（最終閲覧日：2023 年 1 月 18 日）

付録

運行団体と題材の記録

西暦	和暦	賞	題材	団体名
1955	昭和 30		加藤清正	田町
〃	〃		千代萩荒〇子男之助	川端町
〃	〃		畠山重忠、巴御前	東町
〃	〃		源義経	敷島町
〃	〃		自雷也	平井町
〃	〃		大石良雄	幾島町
〃	〃		曾我兄弟	元町
〃	〃		日本武尊	布屋町
〃	〃		里見八犬伝	弥生町
〃	〃		三国志	飯詰
〃	〃		曽我五郎	旭町
〃	〃		曽我五郎と五所五郎丸	柏原町
〃	〃		牛若丸と弁慶	寺町
〃	〃		牛若丸と弁慶	日通
1962	昭和 37		羅生門	（不明）
1966	昭和 41		牛若丸・弁慶	元町
〃	〃		鍾馗（推定）	寺町・岩木町
〃	〃		信長と荒馬	田町・栄町
〃	〃		大森彦七と千早姫	平和町
〃	〃		大石内蔵助	株式会社れんばい市場
〃	〃		三国志　関羽奮戦の図	鎌谷町電力子供会
〃	〃		大江山　源頼光と酒呑童子	（不明）
〃	〃		間垣平九郎	（不明）
1970	昭和 45	市議会議長賞	加藤清正	（不明）
〃	〃	商工会議所会頭賞	大森彦七と千早姫	（不明）
〃	〃	青年会議所理事長賞	草薙の剣	松島連合町内会
〃	〃	市観光協会長賞	鍾馗と鬼	旭町
1970	昭和 45		龍王と金剛力士	川端町子供会

〃	〃		茨木	五所川原青年会議所
〃	〃		坂田公時と源頼光（推定）	上平井町
〃	〃		碇知盛	下平井町
〃	〃		素戔嗚尊の大蛇退治	新町
〃	〃		児雷也（推定）	田町・栄町
〃	〃		曽我の五郎と御所の五郎丸	布屋町
〃	〃		山姥と公時	（不明）
〃	〃		武松（推定）	（不明）
〃	〃		清原武衡	（不明）
1971	昭和 46	市長賞	連獅子	旭町
1972	昭和 47	市議会議長賞	茨木	旭町
〃	〃		連獅子	寺町・岩木町
1973	昭和 48	商工会議所会頭賞	鎮西八郎為朝	旭町
〃	〃		天の岩戸	松島町
〃	〃		玉藻の前	さつき町
〃	〃		勧進帳	平和町
〃	〃		鳴神と岩永姫	大町
〃	〃		国引	寺町・岩木町
〃	〃	特別参加賞	岩見重太郎狒々退治	五所川原青年会議所
〃	〃		織田信長	（不明）
〃	〃		草薙剣（推定）	（不明）
1974	昭和 49	市長賞	水滸伝	（不明）
1975	昭和 50	市議会議長賞	曽我の五郎と朝比奈三郎	旭町
〃	〃	市観光協会長賞	三国志　虎牢関	元町
〃	〃	特別参加賞	国引き	東芝
〃	〃		金剛力士	敷島町
〃	〃		風雲児織田信長	田町・栄町
〃	〃		風神雷神	錦町
1976	昭和 51	市観光協会長賞	野見宿禰と富麻蹴速	旭町
1977	昭和 52	市長賞	紅葉狩	新町
〃	〃	市議会議長賞	加藤清正	田町・栄町

〃	〃	商工会議所会頭賞	三国志　磐河の戦い	旭町
〃	〃	青年会議所理事長賞	大江山	川端町
〃	〃	市観光協会長賞	岩見重太郎狒々退治	敷島町
〃	〃	努力賞	蝦夷征伐	寺町・岩木町
〃	〃	〃	金剛力士	平和町
〃	〃	〃	風雲児信長	上平井町
〃	〃	〃	足柄山の金太郎	もつけ
〃	〃	特別参加賞	大蛇退治	大町
〃	〃	〃	勧進帳	東芝
〃	〃	〃	岩見重太郎狒々退治	（不明）
〃	〃		一寸法師	中平井町・平井町ねぷた愛好会
1978	昭和 53	市長賞	○○の決戦	田町・栄町
〃	〃	商工会議所会頭賞	川中島	旭町
〃	〃	特別参加賞	三国志	大町
〃	〃	努力賞	牛若丸と大天狗	上平井町
〃	〃		平清盛	（不明）
〃	〃		浦島太郎	（不明）
1980	昭和 55	市長賞	九紋龍と花和尚	元町
〃	〃	商工会議所会頭賞	羅生門	姥萢町内会
〃	〃		羅生門	上平井町
〃	〃		川中島	下平井町
〃	〃		九紋龍と陳達	毘沙門
〃	〃		水滸伝　九紋龍史進と青面獣楊志	大町
〃	〃		日本武尊　熊襲退治	本町
1980	昭和 55		西遊記　孫悟空と金閣	錦町
〃	〃		西遊記	平和町
〃	〃		草薙剣	川端町
〃	〃		草薙剣	市役所職員互助会

〃	〃		錦の御旗	東芝
〃	〃		浦島太郎	（不明）
〃	〃		孫悟空	（不明）
1981	昭和 56		曽我五郎と御所五郎丸	柏原町昭和会ネブタ会
1982	昭和 57		川中島	上平井町
〃	〃		政宗	大町
〃	〃		歌舞伎「暫」	三振り会
1983	昭和 58	市長賞	源為朝　朦雲を討つ	姥菢町内会
〃	〃	市議会議長賞	坂上田村麻呂	上平井町
〃	〃		羅生門　渡辺綱と茨木	寺町・岩木町
〃	〃		日本武尊の化身　白鳥争奪の図	本町
〃	〃		曽我の五郎と御所の五郎丸	川端町
〃	〃		水滸伝	旭町
〃	〃		水滸伝	敷島町
〃	〃		戻橋	市役所職員互助会
〃	〃		水滸伝「鉄牛門破り」	三振り会
1984	昭和 59	市長賞	風林火山	田町・栄町
〃	〃	市観光協会長賞	暫	元町
〃	〃		山中鹿之介	上平井町
〃	〃		水滸伝　九紋龍と魯智深	下平井町
〃	〃		三国志	布屋町
〃	〃		源頼光	鎌谷・烏森町
〃	〃		水滸伝	末広・新宮町ねぷた愛好会
〃	〃		景陽丘の猛虎	若葉町
〃	〃		金太郎	（不明）
1985	昭和 60	市長賞	草薙剣	日立東部セミコンダクタ(株)津軽工場
1985	昭和 60		妖怪　戸隠山	上平井町
〃	〃		那智の瀧	下平井町
〃	〃		山田長政	田町・栄町
〃	〃		長尾新六定景と公暁	旭町
〃	〃		三国志　仙人と孫策	敷島町

〃	〃		水滸伝	元町
〃	〃		鬼若丸と信濃坊	末広・新宮町
〃	〃		素戔嗚尊大蛇退治	市職員互助会
〃	〃		金剛力士	もつけ
〃	〃		（担ぎ扇ねぷた）	三振り会
1986	昭和 61	市長賞	義経　海を渡る	（不明）
〃	〃		曾我兄弟　富士の誉	上平井町
〃	〃		朝比奈三郎城門破り	三振り会
1987	昭和 62	市長賞	茨木	新町
〃	〃	市議会議長賞	弁慶と牛若丸	上平井町
〃	〃		村上義光　錦旗奪還	三振り会
1988	昭和 63	市長賞	桶狭間の戦い	上平井町
〃	〃	市観光協会長賞	大河次郎兼任と佐々木盛綱	三振り会
〃	〃		羅生門	下平井町
〃	〃		草薙剣	田町・栄町
〃	〃		大河次郎兼任と佐々木盛綱	末広・新宮町
〃	〃		富士の討入	日立東部セミコンダクタ(株)津軽工場
〃	〃		（不明）	市職員互助会
1989	平成元	市長賞	十三湊　安藤〇〇	電力関連企業グループ
〃	〃	青年会議所理事長賞	左甚五郎	若葉町内会
〃	〃	市内農協懇談会長賞	維新の嵐	上平井町
〃	〃	奨励賞	三国志「関羽」	三振り会
〃	〃		孫悟空と二郎神	田町・栄町
〃	〃		鬼	市職員互助会
1990	平成 2	市長賞	保昌と袴垂	電力関連企業グループ
〃	〃		項羽の馬投げ	旭町
〃	〃		八之太郎と南祖坊	三振り会
1991	平成 3	市長賞	巌流島の決斗	白生会胃腸病院
〃	〃	市議会議長賞	義民　藤田民次郎	下平井町
〃	〃		八幡太郎義家と荒法師	平井町

〃	〃		鬼童丸と為頼	旭町
〃	〃		三国志　剛力項羽	敷島町
〃	〃		項羽の馬投げ	元町
〃	〃		風雲児信長	田町・栄町
〃	〃		北条時頼と三浦介	若葉町
〃	〃		水滸伝　九紋龍	末広・新宮町
〃	〃		項羽の馬投げ	市職員互助会
〃	〃		纏振	電力関連企業グループ
〃	〃		決戦川中島	日立東部セミコンダクタ(株)津軽工場
〃	〃		暫	三振り会
1992	平成 4		雷神	旭町
〃	〃		七福神	三振り会
1993	平成 5	市長賞	安倍貞任	若葉四町内住民連絡協議会
〃	〃	市議会議長賞	戻橋	日立東部セミコンダクタ(株)津軽工場
〃	〃	商工会議所会頭賞	水滸伝	旭町
〃	〃	市観光協会長賞	白鬚水と長円寺の鐘	下平井町
〃	〃	特別奨励賞	金剛力士	三振り会
〃	〃		（不明）	田町・栄町
〃	〃		為朝誉弓勢	敷島町
〃	〃		水滸伝「公孫勝」	平井町
〃	〃		巌流島の決闘	元町
〃	〃		八之太郎と南祖坊	市職員互助会
1994	平成 6	市長賞	巌流島の決闘	白生会胃腸病院
1994	平成 6		綱館	三振り会
1995	平成 7		碁盤忠信	田町・栄町
〃	〃		弁慶不動	三振り会
1996	平成 8	奨励賞	竜王	鎌谷・烏森町
〃	〃		連獅子	旭町
〃	〃		連獅子	三振り会
〃	〃		漢楚春秋　豪勇樊噲	（不明）

1997	平成 9	市長賞	木曽義仲の出陣	日立東部セミコンダクタ(株)津軽工場
〃	〃	市議会議長賞	平成の国取り	下平井町
〃	〃	商工会議所会頭賞	海幸彦、山幸彦	三振り会
〃	〃	農協組合長賞	鬼人のお松	若葉四町内住民連絡協議会
〃	〃	青年会議所理事長賞	平景清	田町・栄町
〃	〃	市観光協会長賞	村上義光　錦旗奪還の図	敷島町
〃	〃	特別奨励賞	風神雷神	市職員互助会
〃	〃	奨励賞	魯智深　五台山を揺がす	元町
〃	〃		怪力朝比奈三朗	旭町
1998	平成 10	市議会議長賞	鍾馗	三振り会
〃	〃	農協組合長賞	張順水門を破る	田町・栄町
〃	〃	青年会議所理事長賞	稲葉城乃大猪退治	市職員互助会
〃	〃	〃	八之太郎と南祖坊	誠和会
〃	〃		天空翔龍　呂洞賓	旭町
〃	〃		国引	下平井町

聞き取り調査の記録

N 氏の話

・担ぎねぷたについて

N：竹でロウソクで、本当の歴史のねぷた作った。平成 13 年に準備して平成 16 年に、担ぎねぷた出したんだけれども、その時に竹でロウソクで、のりも全部自分たちで作ったの昔なりの。

私：ご飯粒とかで（作ったんですか？）

N：本当はご飯粒でやれば一番いい。昔はご飯粒。その後は「白玉」って「白玉粉」ってあるんだけれど、その粉を使って水から練ってのりを作って。それは 3 日 4 日経てばすぐカビ生えるんだよ。それで弘前大学の音楽の先生も来て、むったど紙貼りに来たものだよ。立佞武多の館のオープンの時に、弘前大学の学園隊が来ているんだな。その時の先生。

・昔のねぷたについて

私：ねぷた自体は竹で作ってましたか。

N：竹、竹。もちろん。針金なんて一つも入っていない。

私：大きさはどれくらい？

N：大きさはさ、結局は大正に入ってからねぶたは小さいんですよ。せいぜい、なんぼあったかな。7、8mあったかな。大きさとかはちょっと分からないんだけどさ。

これが早い頃の、明治から昭和までの大正までひっくるめて、早い頃の作った人形なわけ。ねぶたって、ねぶたかどうなのか分かんないだよ。鯉とか、最初そんなものから作ってるの。動物とか金太郎とか。

これは1926年だから。こういうの見せておけば良いなと思って出しておいたのよ。そうすれば、私の話よりもこういうのの方がその当時のこと分かる。細かくみんな虫眼鏡で見れば、人が何を着てるか衣装とかでもその時代の背景も分かる。あんたたちが大事なのは、そういう背景を見たいんであれば、そういった調査をこの写真から探せばいいと思う。建物の形とかな。

家の中なのか、大きい家なのか、昔の家って天井高かったから。だから、そういうのも読めるし。私はねぷたで大事なのは、五所川原のねぷた、雲漢、額、高欄ってあるんだけれど、それから人形、それに後ろに見送りって。この 4 つのパターンが五所川原のねぷたの型なんですよ。雲漢っていう文字、調べたこと分かってる？

私：分かってます。でも、けっこう特徴的な、今とちょっと違う形してる。

N：最初の頃だからな。大正とかさ、その頃だと思う。明治だかどうか。まだ電線とか何もない。だからこの後に、こういうのが原点で大きくなっていったんだと思う。

私：小さい頃って、ハネトとかって

N：ハネトって形はない。五所川原のねぶたは。手踊り。昔は町内で盆踊りをやって、言い歩進めば 2 歩下がるような踊りであったの。それで五所川原のねぶたはとろいって言われたの、運行の状態が。警察に私が実行委員長でいつも叱られたものだ。進まないってこ

と。これがだから多少大型化されてきて、立佞武多に近い感じのねぷたなんだよな。人の身長の何倍もある。それが立佞武多かって言われれば、立佞武多の原点の立佞武多っていうのは意味分からないんだよな。「たちね」という言葉自体。漢字の辞典で調べてみれば。これよく見れば、「雲漢」って文字が縦でしょ。なんで縦だと思う？これ、棒でもって歩いたんだよ。その後に担ぎねぷたみたいなのをやって、それからリヤカーに載せて台車で引っ張るようになる。リヤカーに載せて引っ張ってるのもある。だから、この形からこういう形、灯籠なんだよな。外に置く灯籠なの、弘前でよく灯籠祭りある、あの灯籠が大きくなったのよ。それでこういう風に雲漢とか額とか付けるようになって、これもう少し上に上げてみるかって持って歩いてみるかっていうことだと思うんだ。分かんないけどな。その歴史も書いてないから。調べてみればそうなるんだよ。

それから、ここによく言う「つの」って言ってるでしょ。つのって言うものはないの。これ、ロウソク入ってる灯籠の角なのさ。これ名前何て言うのか、正式には。これ四隅にあるんだ。だから前に 2 つずつ、横 2 つついてる。ここに若い小さい子、ロウソク入ってるのよ。下から見ればロウソク。ロウソク交換係だったの。下、空いてるの。空気、酸素入るのに。写真見れば、着てるものからそういう歴史が分かる。ねぷたそのものも竹なんだか丸太なんだか。昔ならさ、生の木をそうしてやってるんだよ。完全に今の台車式になってから、我々ロウソク交換に台車に上ってうんと交換に歩いたもんだよ、運行中にな。ロウソクの火、消えてしまえば。子どもで体小さいから上半身裸でロウソク交換に行くんだよ。すれば、ロウソクのロウが垂れて体やけどしたり、そういうのいっぱいあったんだよ。これもまだ棒だよね。雲漢の文字も縦でしょ。今、みんな横でないとだめだと思ってるんだよ。

・担ぎねぷたの話

私、だから担ぎねぷた、竹でロウソクで作ったのさ。実際に運行してる大きい立佞武多と一緒に。9mの人形。みんなでこうして担いで。人形、福士君に作らせて。五舎の会の私、会長だから。全部竹。針金は一切、使いたいって言っても使わせない。指も全部竹。中、ロウソク。のりは自分たちでしらたまの粉煮て作って、ボンドも一回も使わない。のりも 2 回ばかり失敗してさ。最初、楽するのにお湯入れてのりやったら、のりボロボロになって。白玉を完全に水からストーブに入れてゆっくりいつも混ぜて、手やけどするくらいいつも混ぜて。

（中のロウソクに火を付けるのは）大変だよ。3 人ばかりで上っていって、下から点けていけばだめなの。上から順番に下げていかないと、上にいる人熱くて。熱バーッと上がるから。ロウソクも、金ないから葬儀屋にお願いして、葬儀屋で一回葬儀終わるとこれくらいの太いの、あれをまたロウソクの再利用って、今 100 均とかで売ってるロウソクあるでしょ。ああいうの再利用でまた葬儀屋がその買い取り屋に売ってるわけよ。それを売らないで、下さいって青森と五所川原の 3 件の葬儀屋にロウソクを売らないでもらって、もらったの。それを今度、釘、ロウソク必ず釘に刺してやらないといけないでしょ。こんきぶ

んはロウソクって燃えないんだ。釘の中では。だから、さらにこれを 2 時間燃えるようにして長さを切ったの。長いロウソクを 3 本に切るとか 5 本に切るとか。一回焚いてテストして。私はそこは徹底してやったよ。失敗してるんだよ、何回も。（消防法とかは）全部引っかかる。消防署で検査に来る。紙から何センチ離れているか巻き尺持って紙裏何センチ離れているか。そして私はこの昔の灯籠みたいに紙貼って、横にすればどういう状況で紙燃えるかって、燃やして見せて。消防署員だって我々よりうんと若いから何も分かんないでしょ。私がまだ 55 くらいの時。35 くらいの人が検査に来るんだよ。だから経験もないでしょ、そういうの。燃やしたんだよ、実際に。火事起こしたんだよ。駅前で 2 年目の時燃えたのかな。それが牛若丸が津軽海峡を渡るという題名で作ったの。それ、船の後ろの方が押さえてるものが風の勢いで糸切れたのよ。それで人形、ドンと置いたわけ。重いからみんな駅前に行って最後に。ドンと置いたら、それが風来たのとバンと置いたあおりで、くっついてしまったの。このくらい間隔空けたんだよ。消防法の許可で、こんき空けなさいって、はい、って。それでも燃えたの。くっついて燃えてつらつらつらって燃えて、見てる人たちも弘南バスの東京に帰る人たちも「ワー燃えた燃えた」って大騒ぎしたよ。最後だからねぶたも次々戻ってくるでしょ。次の日、なんも寝ないで修理して、ねぶた終わって 9 時 10 時から仲間を全部集めて、それで足場も何も組まないでバケット車を 1 台借りてきて。商工会議所の専務さんがさ、警察も「明日出さないでくれ」って。「ううん、出す」なぜ出すって言ったか。私たちの小さい頃は、昔喧嘩ねぶたで石を投げてねぶたを燃やして、燃えたのを今の火消し棒で消したり、中に入っていってタオルでこうやって、手拭いだろうな。手拭いでこうやってやれば火消したの。水なんもかけないんだよ。そうした経験あるから。私たちは担ぎやった時、消防署で消火器を付けなきゃだめだって言ったの。消火器 2 機付けたの。実際、燃えたのは消火器で止めたけど、中に入っていって。入っていった若い人、帰りにみんな釘が足に刺さって、地下足袋だからみんなロウソクの釘出てるでしょ、それブスブスって病院に 3 人も行ったよ。だから、いろいろな経験をさせて、それは福士君みたいな若い仲間で。三振り会の。私のおかげで、ただもの覚えただろうな、彼らたちは。

・昔の祭りについて

私：町内で運行してた時、浴衣とか（どうしてましたか）。

N：全部町内で作ってる。半纏も。そもそもが、五所川原の観光協会の実行委員長やった時には、観光協会はその時合同運行だったの。その前は自主運行って、町内で警察の許可もらってやってたの。そのために喧嘩ねぶたが始まったの。

私：（立佞武多復活の際）寄付はどれくらい集まりましたか？

N：寄付は 500 万近く集まった。最終的には。だけど、結局は許可なく金勝手に使っている人いるから。解散会やった時には 100 万くらい余る予定だったのさ。80 万か。それが金が集まってこないから、赤字食った。60 万くらい。それ平山さんが出してくれたの。

我々ねぶた作った頃はさ、町内でやった頃はな、形は今の形、額、高欄ってなって、ここ

まではみんな同じだよね。ここに雲漢となるわけだな。ここに人形あるわけだ。この形は変わらないんだ。ただ、今みたいな立佞武多、こんな大きい人形、青森のねぶたみたいに高さがこのくらい。5mはあるかな。（人形下は）2mくらいだな。我々の頃は、この真ん中に生の木が入ってあったの。そして例えば人形の腕でもなんでも胴体でもあれば、また木を接いでここにロウソクが立つように釘いっぱいあった。ここ（真ん中の木）に梯子あるのよ。木の板を打ってあって、中に。我々はここを伝って、ここに手届く所まで、届かないとここにマタギ付けてもらって、ここに足かけて、それでロウソクを刺して。我々が小さい頃は、中のロウソク交換係はそうなの。これは下から手入れて火点けたりして。上からだと熱くてだめなんだ。間隔狭いから。で、ここ（台の上）には必ず旭町の〇〇、題目な。お尻の方には必ず「見送り」。見送りは必ずついてあった。この見送りはさ、優しい絵を描かない。生首の描いた絵とか。これはなぜかっていうと、人形がさ正面的には人形武将でやさしくなく厳しい顔をしてるけど、ねぶたとねぶた、昔の場合は自主運行だからこのねぶた 1 台なら 5 分も 10 分もかからない、10 分から 15 分か。次のねぶた来なかった。なぜかというと、各町内は道路あるでしょ。これ旭町だとする、これ下平井。ここはここしか人形来ないでしょ。そうすれば、ここ大町だとすれば（違う町内のねぶたと）ぶつかることあれば喧嘩。なぜかというと、五所川原のねぶたは攻めねぶただから、下がることしない。だから「お前の方、左に寄れ」車がギリギリに入って「左にもっと寄れよ」ていうのも同じ。どっちかが譲れば良いけど譲らないのよ。お互いに。だから喧嘩になって、人形を燃やしたり胴体を燃やしたりしたの。これが自主運行の時に起きた原因。喧嘩ねぶたの始まり。

私：自主運行はいつ頃までやってましたか。

N：多分さ、商工会議所とかが管理してからだから昭和のいつだろう。商工会議所の資料を見ないと分からない。

私：石投げ合ったりしたのは。

N：大正時代だと思う。明治の終わりから大正時代。まだ許可制が、合同運行になってないから。合同運行になってからそういうことほとんどないから。やっても、喧嘩はしょっちゅうしてあったけどな。それは酒飲んだ勢いの、そういう関係。小さいときは小学校の頃は、自主運行。合同運行ではない、と思う。ただ、金太郎の胴巻き、腹巻きに親とか爺様に石ころいっぱい詰められたの分かってあったの。今の本町あるでしょ。青銀の前はこんな大きい川だったんだよ。ふたも何もしてない。だから前を通れば喧嘩すれば、あの川に全部投げられた、ぼちゃぼちゃと落ちたもんだよ。我々小さい頃のねぶたの意識はそういうのだ。それから今の火消し棒ってさ、竹にいっぱいこう付けて、洗面のたらいに水いっぱい入れて、これを逆さまにしてつけておいて。それで燃えればすぐひっくり返してビューってやって、そして消してあったよ。ただ、あの当時は 1 本の竹でいいけど、今の立佞武多になれば届かない。二十何メートルだから持って歩けない。昔の図面などを見れば必ずこういうのがついてる。明治の頃のやつ。

私：町内でずっと立佞武多になるまで、ずっと作ってましたか。どっかから買ってたりしてましたか。
N：作ってあった。我々もう社会人になってからだと、人形師が木造、青森で作ったねぶた、木造から買ってきてた。木造の人形師が五所川原の人形請け負っていた。その人は青森で修行して、青森のねぶたを作ってきて木造の地元に帰って来て、それで作ったから五所川原の 4，5 団体のを作ってた。それから五所川原の人間がだんだん真似事に作るようになって、今の五所川原のねぶた作ってる高校でもなんでも作るようになったのも、立佞武多作った平成 8 年以降だよ。だから、我々はみんな警察の許可もらって台車だけ持って行って（ねぶた）積んで帰って来たんだよ。台車はこっちのものだから。歩いて行ったの、木造まで。木造まで歩いて行って、台車引っ張って 15 人、20 人でさ、町内会のメンバーが行って提灯持って車誘導しながら、人形積んでまた帰って来て、持って来てからまた位置を振り替えて、今度額、高欄と作った物はめこんで、ねぶたが一回り大きくなる。ナヌカ日になれば、橋の上から順番に人形をちぎって投げて、今は針金だからちぎられない。ペンチ持って行ったりしないとだめだけど、あの当時は竹だから。（ねぶたは）流して良かったの。今は河川敷法でものを川に流してはだめでしょ。それが始まってから流したことをやらなくなったの。最後に今のねぶた流しの歌を歌って帰って来たんだけど、その台には木の枠だけあって、その真ん中に面をぶら下げるの。この面だけは流さなかったんだよ。それを持って町内の広場で面を飾ってお酒を飲んだわけ。（ねぶたを流すときは）壊すか折るか、ナタとかで木の台とかあれば、そこで切ったり折ったりして。例えば障子 1 枚くらいの形になったら、そのまま流して良かったんだよ。本来はねぶた流し（は）、灯籠流しが起源でなったんだろうな。それ（歌）が五所川原でも使うようになった。

・五所川原の祭りの部類について

五所川原の場合は、なぜ「ねぷた」ってなったと思う？これさ、簡単なこと。五所川原の市長だった佐々木栄造さんが初代の市長になったときに、ねぶたの名称を何にすれば良いかと商工会議所が市長の所に相談に行ったんだよ。分かんないから、弘前が起源的に一番ねぶたが早いと、津軽の殿様がやらせたんだろうからねぷただ、と。青森はその後にねぶたってやってるから。青森は五所川原と同じだと喋っている人もいるし、それは我々は分からない。五所川原は歴史をキツキツと整理してる人がいないから、だからそうなのよ。記憶って飛んでしまうんですよ。でも、文字には感情とかが入らないから私は残す気ないの。

・化け人のいわれ

私：小さい頃、祭りで囃子やっていましたか。
N：やってるよ。笛は吹けないけれど、太鼓と手振り鉦。
これ、よく見れば火消し棒ってあるでしょ。私もこの人形作るときに、毎日虫眼鏡でどんな人いるか、それで鼻白ってあるでしょ。これ、なんで鼻白なのかって。ほっかぶりして、なぜキツネとタヌキがいるのか。分かんないでしょ。これ、化け人というのは道化師とは

違うの。津軽で言う化け人というのは、五所川原のいわれからいけばキツネとタヌキは人間に化けることができる。祭りを見るために、浴衣もほっかぶりもしてきたけれど、顔だけは化けられなかったということなのよ。この中にも、キツネ顔とタヌキ顔がいるわけさ。だけど、浴衣も着てるしほっかぶりもしてるのよ。
私：人に化けてるということですね。
N：そうそう。道化師というのは、今でいうスカート履いたりして要するに盆踊りとかにいる人よ。オカマに化けたりとか。それは道化師タイプなんだよ。化け人ではないわけよ。（化け人というのはキツネとタヌキが）化けてこの祭りを見に来た、あんまり賑やかだから山から下がってきたのよ。だから顔だけはキツネ顔とタヌキ顔で。鼻白はそのキツネなんだよ。タヌキは鼻黒くなって紐、ひげ 3 本でしょ。でも、それもちゃんとした歴史書ないのさ。でも化けるということに関しては、化け人だからそれしかないわけよ。キツネとタヌキしか化ける動物いないんだから。ほっかぶりも全部豆絞りに決まっていたんだけれど、なぜ豆絞りなのか。手拭いも豆絞りが作りやすかったんだよ。
・昔の祭りについて
その当時は、町内で寄付を集めていて、「町内会でねぷた出すから」ってトータルで 30 万かそのくらいでねぷた出していたんだよ。昭和 35 年頃は高卒の給料が 9000 円だもの。町内で何百円ずつとかって出して、そして医者やってる人たちから多くもらったりして。旭町とかはそうだったよ。（寄付を）もらいに歩くのさ。袋持って。帳面持って、必ずいくらやったとかってさ。それで、大人は酒飲むとき、身欠きニシンとキュウリの漬物だよ。決まってるんだ、これも。酒のつまみな。ニシンには味噌つけて。それを祭り終わればみんなで集まって、大人は酒飲んで、あの時日本酒とかビールとかは何も飲んでないの。（祭りの）スタートの時は、コップ 1 杯ガーッと飲んで出るの。勢い付けないとだめなんだから、大人はな。我々、その頃子どもだったから。それは時代の背景の問題。
私は（東京に行っていた 6 年間を除いて）ずっと小さい頃から。おじいちゃんが祭り好きで、父親は私が 6 つの時に離婚してるからいないんだよ。ねぷたを真ん前とかあの付近で見て、おじいちゃんがいつも町内のねぷたに行っていたから。ねぷたが好きなのか酒飲むのが好きなのか分からないけれどね。（酒飲みに来るのは）みんなねぷたの協力者なんだよ。だから、自分で飲む酒を自分で持って行けば、他の人にも飲ませる。そういう集まりになってしまえば、ねぷたの仲間意識が強いわけでしょ。町内の交流がもっともっと増すわけでしょ。あ金ある人、お医者さんやってれば、「私行けないけど頑張って下さい」とお金出してくれるし。昔はおにぎり握ってゴマ付けて、中にサケとかマスとか入れて、決まってるんだよ。子供たちは、それとお菓子もらうのが面白くてねぷたに来て。
昔はねぷたの台車に子ども載せたもんだよ。小さい子ども。台車の横に並んで載せたのよ。それで親が回りを歩いていたの。（台車に）子どもが座って足だけ下ろして、何人も座ってぐるっとこうやって。5、6 歳まではみんな座ったのでないか。みんな、そういうスペース作ってくれるんだよ。子どもいたな。余ってしまってたな。だって一軒で 7、8 人いたも

ん。7人兄弟、8人兄弟も結構いたものだよ。私、担ぎねぷたやった時、人形に穴空けて顔出して写真撮ったものだ。この立佞武多の最後の時もここに上がっている人いっぱいいたでしょ。

・台座の形式について

これさ、額、高欄というけれど、本当はこの高欄というのはさ、橋なんだか。橋にも高欄があるわけ。一番多いのは神社にある。だってこれが額、高欄と言うのは、私は神社の額、高欄だと思うけれど、福士君とかは牛若丸の橋の高欄の意識ある。あれも確かに高欄で、太鼓橋で裏に木の形を付けてるの。この下の方に紙貼って。だから私が担ぎの時、板目やったんだけど。それは神社なのか、今の橋の高欄に人形を上げたのか、高欄の意味が分からない。私は、もの上げるとすれば神社だと思う。神社が神輿を置いたりするのに、あと、おもちとか賽銭投げたりするから。その意味があって高欄を付けたと思うんだよな。でも、それもはっきり分からないの、五所川原の場合は。金具のさ、合わさるところ交わったところに付いてるんだよ。

・昔の巨大ねぷたについて

（明治時代のねぷたは）凄いよ。わら靴みたいな感じになってるでしょ。真輝が作った人形は格好良くないんだよ。ずんどうでしょ、ほら。胴長で。これが今の五所川原の人形と似てるのよ。これは、ちゃんと鎧、甲冑着たりしてるでしょ。それで靴でも何でもしっかりしてるでしょ。それでアンバランスなんだって。この斧の柄だって、これに対して太すぎるでしょ。これ、竹でロウソクでよくこういう恰好作れたもんだ。これロウソク入れるために太いのさ。

・担ぎねぷたの話

これ 2004 年、今から 18 年前の（新聞）。私たち、まだ若かった頃だ。それで、これ次の日すぐまたねぷた、紙ちゃんと貼って色塗って出してるんだ。そしたら、前の日見た人「あれ、これ昨日燃えたねぶたでないの？」って言っていたよ。私たちは昔から燃えたねぶた、小さい頃みんなで夜を徹して修理して出したもんだから。だから、その意識があってみんな集めて直して。警察一番びっくりしていた。「あなたたち、何も寝ないでやったのか」と。一昼夜やって、昼間1、2時間くらい寝ってさ。これは、のりが違うから紙が簡単に剥がれないのよ。竹は必ず厚みある。だから貼るときは紙を押さない。それで（交わっている所でも）高さ同じにする。竹は割ってもらうの。それは弘前の竹屋さんに7、8万出して割ってもらったの。人形用に。その後に、青森の竹屋さんに頼んだら全然だめ。皮だけにしてしまって身を取ってしまったから、竹弱くてだめなの。だから、7、8 万分竹捨ててしまった。（竹の）青いところだけ残して、ちょっと火であぶって水に浸けると丸く形になるんだよ。割ったままだと 5 ミリか 7 ミリくらいになるの。白いところを削れば 3 ミリくらいだからアールつけるのもうまくいくよ。でも人形師はそれをやりたがらない。万が一、それが形崩れればどうなるかと心配なんだと思う。だから「この部分、針金にしてもいいか」って言うけれど、私は多少形が悪くても全部竹でないとだめ。それで今の担

ぎねぷたは全部竹でやったの。（重さは）警察には 1 トンと伝えたけれど、実際は 1 トン 500ｋｇあったと思う。面白かったよ。

・昔の祭りについて

子供たちは鉢巻き。豆絞りの手拭いをねじって、大人も豆絞りを折って鉢巻きにして、前絞りと後ろ絞りといた。人夫なら作業用半纏そのまま着てくる人もいたよ。町内でまとめて半纏とか浴衣作ったのはだいぶ後になってからだと思う。浴衣をほとんど女の人が着るから。男は半纏。半纏が一番早いのは平井町だと思う。鎌谷もけっこうねぷた出してた。鎌谷は、私が実行委員長の時は青森からねぷたを買ってきていたんだよ。青森のを五所川原の台に載せるから、あんまり膨らんでしまって人形の足を切ったりしたんだよ。そうじゃないと合同運行の許可を出せないから。2 人人形の 1 つを買ってくるんだ。

現代の人が昔のものをどうだったのか調べていって、それを雑誌、本にしたりして継承させていくためのものが必要なわけよ。そうじゃないと毎回変わっていくわけよ。我々は自分たちが経験した年代のことを教えているだけで、それを続けろというわけでないんだよ。だから人形師も同じよ。

S 氏の話

先代が町内会長やってあったのね。その時代はずいぶんねぷた出して、町内会としてねぷた出して、みんなで交流ありましたね。当時は私たち商売柄、町内会の名前入った揃いの浴衣を作ってもらいましたね。注文してもらいましたね。

Q：五所川原では（注文を受けたのは）ここだけだったんですか。

その頃はもっと中三さん、丸友さん、マルキさん、みんな同じ商売ですからみんな競争で浴衣作ってましたね。うちだけじゃないです。今残ってるのはうちだけですけれども。皆さん競争して安く良い物を、という商売をしていましたね。だいたい町内会で 30 枚とか 50 枚とかお揃いで作るわけね。名前入れてね。私どもは柏原町内会だから地元だからマルキさんと交互に注文もらったりね。あと、私たち注文たくさん受けたのは平井町。平井町の注文たくさん受けましたね。当然本町さんあたりは中三さんに行ったと思うしね。寺町は、ナリさんとかサンゼンさんとか。地元でみんな、町内会に入っている呉服屋みんな当然注文受けますよね。錦町さんももらいましたよ。

Q：規模はどんな感じだったんですか。

規模はやっぱり平井町が大きかったですよ。ただの平井町から始まって、上平井町、中平井町、下平井町までね。多かったですね、平井町さんがね。一回作れば 3 年、5 年とか使いましたからね。

Q：それに付随する物とかも売っていたんですか。

もちろんですよ。別染めの、別あつらえの浴衣、それに付随する帯とかね、花笠とかね、おこしとかたすきとか、当然一式ですね。

Q：町内の半纏もですか。

当時は半纏はあんまりなかったですね。半纏はあんまり作らなかったですよ。よくお子さんが半纏着ていましたけれど、既製品の半纏でしたね。お子さんは半纏着なくても、普段の、私たちの若い時代はさ、浴衣は毎年作ってもらったの。今は一生に一枚とかでしょ。昔はしょっちゅう浴衣着ていたんですよ。浴衣に限らず普段のかせりでもプールでもしょっちゅう着物着ていたもので、着れば消耗するでしょ。着れば洗うしね、洗えば消耗します。そうすれば消耗すればまた作ると。今と違って子どもさんが出生率が高くて、たくさん子どもあってね。町内会でも子供会が当然ありましたしね、各町内に。夏休みになればラジオ体操、そういうどっかの空き地借りてラジオ体操が必ず夏休みにありましたね。ところが今は、柏原町内会は昔 200 軒、200 戸もあったのが、今 60 か 70 です。戸数が減ってしまって。その上に高齢化で小学校とか中学校とかお子さんがゼロに近い。子供会できるわけない。ほんと世の中変わってしまって。錦町さんは木村燃料さんがまたね町内会ね。全体数も減っていますし、その上にみんな独立して。昔私たちは 3 世代一緒に暮らしていましたね。3 世代ザラで 4 世代もいましたね。今は全部外に出ると。一緒に住まないと。そういう世の中ですから。そうなれば地元の郊外の新興住宅地に移り住むわけね。だから街中ますます過疎化して。

Q：祭り当日はどんな感じだったんですか。

祭り当日は店は休みません。昔は休みほとんどなかったんですよ。今でこそ週 1 で休んでますが。年間4、50日休んでますが。昔は年間2、3回しか休みなかったですね。それだけ従業員がたくさんいたので、交代して店を開けられたんですね。今は頭数少ないから交代要員がいないから店閉める必要あるね。

Q：立佞武多になってからは、商売的に変わりましたか。

（浴衣などの注文は）全然ないのと同じですね。今はネットで注文したりね、地元から買わない人が多いですね。私たちもたまに別染めやってますけれども、ほんのたまにです。若い人は浴衣でも半纏でも買い物の仕方が変わってしまって。

（奥さん）今、市で着ているのはうちで注文もらって

今の立佞武多の浴衣はうちで納めましたね。半纏ではなくて浴衣。

（奥さん）市長さんとか議員さんの浴衣。あれはうちで注文をもらって市の会議所とか通してご注文頂いて浜松の方に図案もらってね、できる範囲でとか、今どきはね皆さん図案をパソコンで。あり得ないんですよ、我々からすると。この柄入れて、ここにこれ入れてって機会はすぐできますよね。でも染める方は型起こして昔ながらの板の 12、3mのを型転がしたりしてやっていく。そして、それを 1 枚の着物に柄がなるわけじゃないですか。あれは凄かった。時代が変わってるので、我々の長年やってきた技術がなかなか対応できなくなってきているというか、そんな感じもありますね。

私：町内でやってたときは町で寄付を集めてましたか。

町内のねぶたはね、町みんなで楽しむもんだと、そういう考え方があったので、みんな戸別訪問で集金に歩いてましたね。私どもも何回も集金に歩きましたよ。町内会ばかりでな

くてよその町内も回りましたね。
（奥さん）皆さん協賛してくれていた。私が嫁に来てからの話ですけど、凄い距離回ってあったね。錦町とかあっちの方回ってまたやったりとか、凄い範囲回ってくれてたので皆さん楽しむわけですよね。この通りに住んでいない方でも。だから協賛してくれていたんでしょうね。私たち柏原町内会に限らず、どこの町内会でもそうしてましたね。各町内でみんな回ってましたよ。私たちは、ねぷたの前になればのし袋 10 枚とか 20 枚とか用意しておくの。ちゃんと 500 円札入れたり 1000 円札入れたり。
Q：勢いが凄かったんですね。
それは凄かったですね。ねぶた始まる前にね集金の人がねちゃんと衣装着て袋持ってね各店全部回ってきて、それが常識になってるので事前に用意して、札みたいなの、何処何処のねぶたですって、町内の名前書いて領収書代わりに置いていって、それを頂いてのし袋に入れてお渡ししている。何件もね。
そう、ねぶた祭り始まる前になれば何十枚も袋準備したね。
（奥さん）近年は市でねぶたが大きいのに変わってから市が主催みたいになってるので、寄付は来なくなったね。
募金は来なくなったね。そこが一番違うね。

K 氏の話
セイナリさんの女の人とか、白生会、中村整形、その辺からみんな女の人出たんだ。それで足りなくて、漆川から 10 人くらいは借りてきたんでないかな。一日一晩 5000 円かけて。その頃、ちょうどうちのおじいちゃんが町内会長やったり三役やっていたから、いろんなの借りてきて 3 日出たね。ナノカ日だって、今お昼何もやらないでしょ。その頃ナノカ日ってすれば 8 時、10 時頃から集まって昼ずっと跳ねて。回る距離も結構あったしさ。前は、元の市役所の方あまり通らないで大町ずっと通ってさ。
旭町でねぶた出さなくなってから五高に、市の大きい太鼓よりも先に大きい太鼓買ってるのさ。弘前の麹町で太鼓作っている所あるのさ。そこに注文して、おじいちゃんやっていたあたり。大きさはどっち大きいか分からないけれど。
五高のねぶたも、うちの孫も五高入ったあたり、本当にさ、そこに跳ねればそこに見に行って回ってあそこで跳ねればまた見に行って。本当に見に歩いたし、旭町で出してたあたりは、旭町誌っていうのもあるんでないかな。
Q：旭町のねぷたは青森の人呼んでいたんですか。
ねぶた師をさ、集会所に泊めて寝泊まりさせて、そうして作ったの。毎年ではないけども。それでも何回かそうしてやって。
Q：寝泊まりして何日くらいで作ったんですか。
そこまでは覚えてないな。あのさ年いったさオドさまな人で小柄でさ。北川さんだったかな。みんな特徴あるから、うちのおじいちゃんなら「北川さん、ねぷた良いばって腕っこ

細くてさ」って。やっぱり頑丈に見せた方が良いんだろうけども、その人の特徴がまたね。それは私にも喋っていて記憶にあるの。本当に何も立派な人でないし、小柄なとうさんだったの。今、ねぶた師みんな頑丈での。若い人でも引退した人でもほら。（北川さんは）痩せた爺様だったよ。
旭町は何年も出したからね。子供たちもだんだんなくなってきているからさ。今、町内に子供たち何人いるかな。子供会もなくしてしまったし。みんな老人ばかりになってしまったから。老人クラブ、今年の春まで私会長やっていたんだけれど、出てくるって言えばじょうないに出てくるのも老人クラブに出てくるのもみんな同じだから、老人クラブ解散しちゃった。施設に入ってしまっている人いるし、死んでしまった人もいるし、だんだん老人クラブも人がいなくなってしまっているから。町内（会）はなくせないからやってるけれど。
いつも何百万もかけてねぶた作らせて、年いった人たちもそれに手伝えなくなってしまったから、旭青会って若い青年部で作るようになったというか、青年部ではいつも買ってきていた。木造から買ってきた。私たちのねぶたはさ、昔の作らせたねぶたは中里に売ってやったの。毎年の恒例になってしまって。良い賞ばっかりもらったんだよ、だから。市長賞とかさ。漆川の女の人とかに、といってもみんな年いった人たちばかりだけど、ねぷたに踊りに出る人は。ある年、足首痛くして、ねぶたの時漆川まで踊り教えに行って「私、今年出られないのさ、足悪くして」（言ったら）「わい、おかあさん出られねばどうす？」ってお世辞喋られてさ。でも楽しかったね、若かったし。ナノカ日はだから若い人たちと跳ねたよ、若かったから。勢いついてしまってさ。楽しかったね、今思えば。
（おにぎり作るとき）手真っ赤になってさ。あっつい炊きたてやるんだもん。そうすれば、あっついから水つけて塩つけて握るじゃん。そうすれば先頭でやってる年いったバサマたち、「よげ水つければまね。飯割れでまるはんで」って（言われて）。だから「塩で塩で」ってさ、（手に）くっつかないようにするには塩つけてやればいいって。そうして怒られてやっていたよ。昼間おにぎり作りに行って、晩になればねぶたに出るんだもの。肩凝ってしまってさ。緊張するのと、おにぎり何百個って握るもんだから。一人ではないけれどみんな丸くなって茶碗に入れて「はい！」って渡して。そうして握ってたから握って楽しかったんだよ。終われば今度そこの M さんに肩もみに行くくらい肩凝っていた。そういう集まりがないと、世間も知らないし年いった人バサマたちの中に入ってさ握ってさ。旭町はおにぎりも美味しかったし、それにきゅうりの 1 本漬け。だから、他のねぶたに出ててもここに着いてお菓子渡すってなればそっちからガーッと。本当に旭町はさ。支度したよりもあまりにもたくさん出るから最後あたりはさリボン渡したの。リボンと引き換えにやるようにしたの。綱引っ張っている子供たちから順番にリボン渡して。お菓子の袋詰めも 500 個くらいは作ったんじゃないかな。楽しかったよ。終わってしまえばテント張った下にブルーシート敷いて大人の人たち酒飲んで。
立佞武多になってから凄いよね。昔は駅前から出発したから、そうすれば前から何番目な

らその辺にいればいいとか。大町のあたりに並ぶこともあるし、順番から行けば。今は前と道違うでしょ。短くなってるしさ。

O 氏の話

戦前、戦争前からねぶたを出していたし、私たちもそれに参加した。その戦前に私たちが聞いた話では、なぜねぶたを出すか、と話し合ったんですよ。そしたら、このねぶたは昔武士が敵陣に攻め込むための道具だったんだ。そのためにねぶたを引っ張る人は女装する、女のまかないをするわけですよ。例えば、浴衣を来てお腰を赤いお腰を締め、帯は水色、たすきは赤、こう決めてあるわけ。ふかみ笠をかぶって武士が女の服装をして敵陣に攻め込むと。ねぶたの中には武士がいっぱい隠れているわけですよ。そのために出陣のためのねぶただと、そう聞いておりました。せば、なんで男が女の恰好をするのさって言ったら、敵を欺くために女の恰好をしたと。掛け声も「やってまれ、やってまれ、ドドスコドン」と。「やってまれ」というのは「敵をやっつけてしまえ」ということでねぶたが始まったということで私たちは聞いております。その当時は田町・栄町と下平井町しかねぶたを出すところがなかったです。その前は大町とか、あそこは金持ちですのでね、大町とか錦町は出したんですけれども、だんだんだんだんと出すとところがなくなってしまったんですよね。なぜかというと、やっぱりお金の問題もあるし、やる人の「よし、やるぞ」って言う人のやる人がなくなってしまった。それが下平井町と田町・栄町が残った。その当時、戦後ですけれどもその当時は喧嘩ねぶたって、もちろん交通規制も何もないわけですよね。そうすると下平井町のねぶたと田町・栄町のねぶたが道路で行き会うわけです。行き会うから「おめだぢ、そっちさよれじゃ」そうすれば「おら先に来たもの。なして寄ねばまいんだば」という簡単なことから喧嘩が始まったり。その時大人は子供たちを「今喧嘩始まるはんでねぷたから離れれ」って、ずっと離れてしまって始まるんです。それで本当に喧嘩するんですよ。なぜかというと、その当時は左官はコテ、コテを腰に差して大工はノミを懐に入れてる。マサ葺き、屋根をトタンでなくてマサを敷くんですよね。そのマサ葺きの職人は金槌持ってる。怪我すればだめだからねぷたから離してしまって、屋根葺きの金槌というのはこういう棒の先に四角いやつこう付いてるんですよ。屋根のトタンを打つわけですけれどマサを打つわけですのでね。それほど大きな金槌でない。それで喧嘩が始まるんですよ。みんなが喧嘩するのではなくて代表者が喧嘩するんです。俺たちは 5 人も 10 人もで喧嘩すると思ったら代表者が、代表者というのは喧嘩好きな人もいるわけですよね。「どしたってや」「なしたってや」「せや、どうすんずや。この馬鹿者」とたったそれだけの話。それほど喧嘩を強くやらない。鼻血流すとかまではやらないんですよ。大概 1 分か 2 分なれば主だった人が「まあまあ、まあまあ。やめれじゃ。ここはおらほ譲るべし」って仲良くして交代に行く。そういう喧嘩ねぶたであった。それで何が楽しいかというとねぶた引っ張った後、大っきなおにぎり 2 つとキュウリの漬物 1 つ。その当時、もの食べるものがないんですよ、みんな貧乏で。ですから子供たちはそのおにぎりをその場で食べな

いで家に持って行って食べる。そういう時代だったんですよね。
（花笠を持ってきて）ねえ、豪華でしょ。ですから誰が何踊ってるのか分からないのさ。顔分かんないでしょ。だから、たげなことしても後で残らないんです。誰やったか分かんないから。
Q：こういう手踊りは戦前からありましたか。
そう、戦前からあったんですよ。結局、ねぷた引っ張るのは子ども引っ張るんです。子どもを見守るのは親ですよね。母親ですよね。母親は手ぶらでないとだめでしょ。引っ張ることも何もない。それで手踊りやった。ずっと続いた。だけどそれしか楽しみないんだもの。旅行するわけでないし、外に行くわけでないし、結局ねぶたか宵宮しかなかったのさ。海外に行くとかないのさ。宵宮とねぶたが楽しみ。あと楽しみない。
Q：昔のねぷたは小さい頃、作ることにも関わってましたか。
ねぷた作るのに、あんな大っきなねぷたでなくて金魚ねぶたです。ですから金魚ねぶたを作るのに、白衣神社あるんですけれどもあの前は観音様でした。観音様に行者が巡礼して泊まるところがないものだから、その石碑の下に地べたに寝てあった。それを一戸さんという石碑を建てた人が見て可哀想だということでそこに避難小屋みたいな小屋を作ったんだよ。観音様の小屋を作った。その観音様の小屋を借りて金魚ねぶたを作った。その金魚ねぶたを作ったのが、おらと同級生の人で、晩、蚊いっぱいいるから蚊帳吊って竹ひごをロウソクの火で炙って曲げて金魚ねぶた作ったんです。それを今度町内で引っ張るためにはリヤカーの上に台作って金魚ねぶたを載せ、そのリヤカーの中に賽銭箱を入れて「ロウソク代っこもらいに来たじゃ」って各家庭を回ったんです。そうするとお金ある人は 1 銭とか 2 銭入れる。お金ない人は茶碗に米を入れてその賽銭箱に入れた。そういう時代だった。そのリヤカー、まだ白衣神社の所にあるよ。
Q：竹ねぶたとかも何年か作ってましたか。
最初は立佞武多でない、組ねぶた。組ねぶたですから今の弘前とか青森でもやっている平たいやつですよね。あれが組ねぶたなんです。その組ねぶたをうちの方でも作らないといけない。そうなったら誰も作れないわけですよ。金魚ねぶたは作るけれど（組ねぶたは）難しい。それでどうするかとなった時に「せば、町内会で作るはんで青森から職人呼んで作らせるべし」って青森からねぷた師を連れて、平和町の空き地を借りて小屋をやって作った。町内会でやって作った最初のねぶたですけれども、確かにねぶたはできた。できたけれどもお金払うときになったら赤字。今までの予算の倍も赤字になった。その赤字になった時は、ねぶた終わってから計算すれば赤字出てくるわけですよね、終わった後。「そしたら町内会費で払うべし」って言ったら町内の市民が「おらの会費でなしてねぷた払わねばまいんだば」ということになった。「どうすれば良いんずや」「ねぷた引っ張るのにタスキかけた人あるべさ。タスキかけた人責任負えば良いでばな」ということになった。そしたらその時の赤字で 102、3 万くらいになったんですけれども、タスキを掛けた人が 5 万、10 万払ったんです。借金を。それでねぶたその年終わった。次の年から「おら責任負

うんだば、出さねじゃ」誰もお金払うの面白くないから、それで町内会のねぶたはやめ。やめになってしまったんです。それからねぶた、町内会で出されないし、「へば、どうすれば良いば」ってなったら「ねぶた愛好会を作るべし。ねぶた愛好会を作って出すべし。それでもし赤字だったら愛好会が払うべし」ということで町内ねぶた愛好会というものを作って始まった。組員が借金すれば自分で払わないといけないからみんな辛抱して作った。例えば、二次会飲むかという時に 3 回飲むところを 1 回くらいにして。そうして辛抱してやったからお金が余った。余ったお金をねぶた愛好会として積んでおいた。今もねぶた愛好会というので作っています。そうなってでも、なんでねぶた出さなくなってしまったのか、ということになるんですよね。それはやる人がいないとだめ。ちょっとくらい反対あっても何しても「いいね、いいね、やるべし」という前向きな人がいなければリードする人いなければできないです。もちろん「愛好会やるべし」って言ったって町内会長の許可得ないと町内から寄付もらえないですよね。結局そういうことでコロナもありその前も含めて 4 年間も休んでしまった。今年やるべしっていう話になった。そして子供たちのいる家庭に「今年ねぷた出せば子ども出してけるな」って言ったら「まね。ねぷた引っ張ってコロナうつればまねはんで」って子供たち誰も来ない。それで愛好会で出そうとしても引っ張る人が子供たちが来なければ何も意味なさないわけですよ。ですから、そうすればコロナ収まるまで休もうということで今年も休んだんです。ただ、弘前でも青森でも部落で出した、町で出した、単独で出したって見れば残念だなあと思うこともいっぱい。だから今年なんかぐちゃぐちゃして花火見ても面白くないです。

それから、その（立佞武多を運行し始めた）当時始まったねぶたの笛、あるじゃない？ねぶたの笛も戦後、弘前から津軽塗の職人さんが身上がりしたって裏田町に I さんという塗師屋が来たわけ。塗師屋が K 木工所に「わのねぶたの笛でも良いば教えでもいいや」と言ったわけ。それ、今までねぷたの笛がなくて浅井の登山囃子頼んできているわけよ。「それだば良いことだ」と I さんに早速「へば、ねぶたの笛教えてけれじゃ」（と言い、一戸さんは）「わの笛でも良いんだな」と言ったら、K さんは「良い良い、何とか頼むじゃ」ということで集会所で教えることになった。教えることになったけれど、ねぷたの笛を習いに来る人が笛買うお金がないの。私に「どうすば？」と（言ってきたから）「じゃあ、わぁ作るね」（と言い、相手は）「ねの竹あるな」「まぁまぁまぁ」ということでビニールパイプ、水道のパイプあるでしょ。ビニールパイプを笛の長さに切ってドリルで穴空けて（先の筒先の穴を）閉じて、パイプの笛を 20 本作った。それで太鼓をどうするかとなって窓際にベニヤ板を横にして、裏にあるポプラの枝を切ってバチ代わりにして練習させた。ベニヤ板は太鼓代わりにビニール管は笛になって練習した。それで田町・栄町のねぷたの笛が完成した。私たちも習ったし澤田さんも習ったし、完成してから 2 年くらい経ったときサンルートの前の後藤ハンコ屋が「O さんや、ねぷたの笛録音しても良いな」と来たわけ。「どうすんずや」と言ったら「あんまり良い笛だどごろで立佞武多何も笛ないもんだどごろで録音して聞かせてくてや」（と言ってきた。）

「まぁ、五所川原市のためにんるんだば良いでばな」ということで録音していって、それを市民会館で聞かせてねぶたの笛を練習させた。それで立佞武多の笛ができあがった。ということは私たちが根本。元の笛と同じ。それだけが自慢なわけ。
ねぶた出すのにもおにぎり握るのにもご飯炊くのにも、お母さんたちの手伝いがないとできないでしょ。だからある時、ねぶた終わっておにぎり配る時、子どもがもらいに来たんです。そこに皆さんいる前で「ねの親父、ねぷたの寄付けねどごで、なさおにぎりけね！」と喋ったわけ。そうしたらその子どもワーって泣いて家に戻った。そうしたらそこの親父がまもなくすぐに一升瓶持って寄付金持って「迷惑したな、これで何とか堪忍してけじゃ。握り飯かへでけれじゃ」っておにぎり 2 つ。それみんな見てるわけですよね。ですから、ねぷたに協力しないとおにぎり貰えないと分かってしまった。それでうちの方は別にお願いしなくてもご婦人たちがいっぱい来て、おにぎり握り漬物漬けてくれる、協力ができたんです。そういうこともあった。みんなボランティアだから忙しいし行きたくなければ行かなくても良いわけでしょ。しかし子どもある家は、おにぎりもらいに行って断られれば嫌だから皆さん来てくれる。ですから田町・栄町のねぷたが続いてきたんですよね。ですから今後あれなんですけれども、今回会長さんに町内会の会則ってあるんですよ。その会則の中に老人クラブ、元気教室、消防団という風に各会があって 2 万か 3 万円ずつ補助金出してるわけなんですよね。ですからその中にねぶた愛好会も加えてもらえば必ず会則にあるからまた続くんじゃないか、そう考えて今から思ってました。
だから、私たちねぶたやった時は 4、5、6 と晩に引っ張るわけですけれどナヌカ日には朝 8 時から出てお昼に終わるわけです。じゃあそのナヌカ日に何するかというとねぶた流しというものをやったんです。ねぶた流しが何かというと昼に岩木川の乾橋の上に行ってねぶたの面の紙を 2 枚か 3 枚剥いで「ありがとうございました」と川に流した。ですからその当時からねぶたは神様の代わりみたいに五穀豊穣を願い家内安全を願い商売繁盛を願い悪魔退散、そういう願いをみんな込めてねぶたを作って引っ張ったわけですよね。ですからそのおかげであったということで最後にはねぶた流しで川に流した。それで終わりにしたんですよ。その時も払え給え清め給えということを祝詞上げてお礼としていたんですよね。ですから今、立佞武多あたりねぶた流しやってるのかなと思って。
私：ねぷた流しはいつ頃までやってましたか。
戦後ずっと続けて田町・栄町はやって、大きい五所川原の立佞武多出るまではやってたんです。あれ出てから合同運行とか何とかで交通規制かかってしまったでしょ。個人で歩けないわけですよね。警察に怒られる。それでやめになってしまったんです。本来ならねぶたの神様に感謝して、「ありがとうございました」ってナヌカ日に岩木川に流したというのが昔からの伝統だったんですよね。ねぶたは結局神様の代わりですよね。町内会を守ってくれる、疫病退散、商売繁盛、悪魔退散、そういう神様の代わりにお願いして引っ張っていくねぶたですので、当然神様にお願いしお礼として川に流して「ありがとうございました」というのが道理だと思うんですけどね。ただ、それをやれなくなったということは

交通規制で田町・栄町だけで引っ張って歩けないわけ。怒られてしまうわけ。許可もらっても「そんな勝手なことするならだめ」って。それでだめになってしまったわけですよね。だけど、今度復活すればそれも兼ねて警察にお願いするかと思ってました。ねぶたばかり引っ張ってお願いばかりしてお礼しないというのも、これまた道理でないと思うから。そういう心があってこそ長く続くんですよ。ただ遊びとか何とかというのであれば続かないですよね。やっぱりみんなにためのなる信義というものがなければ続かないですよね。ただ、今思い出しても戦後ねぶた始めるとき、ご飯食べられない子供たちがただ道路に座ってるわけですよね。それを町内の鍛冶屋、いつも鎌作ったり鍬作ったりするものだから店先で鉄を叩いてるわけですよね。それを叩いてる時に子供たちを見てると皆軒端に座って遊ぶ力がなくなってしまう、おなかすいてしまって。それを見るに見かねてねぷた出して子供たちにご飯食べさせようと、それが一番最初だったんですよね。そういう歴史があってから町内会で赤字出してねぶたを出さないってなった時、組ねぷた作られなくてその間どうしたかというと木造でなぜか 2、3、4 日で（祭りが）終わるんですよ。五所川原からねぷた買いに来るのを待ってるわけ。私たち作れない時、木造に終わったねぶたを買いに行ったんです。1 台いくらしたかというと 20 万円。買ったやつをまたねぶた終わってから小泊で待っててそれを日にちずらして、買ったねぶたを私たちはまた小泊に売ったんです。そして無駄なくねぶたを使ったんですよね。

来年は何が何でも出しましょう。後世に残すためにも町内会の会則に入れてもらおうと思っていた。そうすれば必ず議題になるでしょ。予算もらっていれば、もらっている人が報告しないといけないし。そうすれば長続きするんじゃないかと思ってます。結局、皆さんが協力する、一人が 10 万円出すよりも 10 人が 1 万円出してくれる方がありがたいですし協力してもらえる。やっぱり出すという人には責任があるから協力もするんです。できることは紙貼りでも 1 枚でも 2 枚でも手伝ってくれれば、それを皆さんが見ているから「へば、わもやんねばまいねべがな」と思って自発的にやってくれるようになるんですよね。そういう町内の盛り上がりが必要。

皆さんの自覚のもとにやってくれれば、田町・栄町のねぷたはこれからもずっと続くし、住民も田町・栄町に住んで良かったな、そういう思い出ができて良かったなというそうなってくれればありがたいですしね。

コロナなんかに負けてられない。ただ、さっき言ったとおり、子どもが参加しないとどうもならないんですよ。子どものためのねぶたなんだから。

やっぱり少しの縛り、粘りがないとものができあがりませんよね。誰かやってくれるでしょ、と待ってれば全然。自分から先にやって粘らないとね。

Q：田町・栄町の台座の部分は町内で作っていましたか。

うん、作ってる。それは倉庫に預けている。台車も見送りの額も。太鼓は私が預かっていた。毎年作ってた。

（お金は）いっぱいはなくてもやる分のお金がなければ。一部の人が責任負うようなこと

になれば、それはもう終わり。
本当に喧嘩（ねぷた）する時おっかないですよ。ロウソクで灯りともしているから石 1 つか 2 つ投げられればねぷた燃えてしまう。紙破れてロウソクに火点くでしょ。それやられないためにも、子供たち危ないから離してしまって喧嘩始まる。その時、私たち離れる方もおっかないからね、そういう思い出がある。それから、やっぱりおなかすいた時おにぎりもらうというのはこれまた面白いもので、それを持って家に帰ってお母さんお父さんが「おお、よくもらってきたな」って皆さん喜んで 1 つのやつを 2 つも 3 つも分けて食べるわけですよね。そうすれば自分で「あぁ、良かったな」と思うんじゃない？持ってきたやつがみんな喜んで食べてくれて、良かったなと思う。なんかそういう嬉しい思い出がありますよね。
Q：太鼓、笛などの楽器や備品は会費で買ってましたか。
うん、ねぷたの寄付から一度に買えないでしょ、何十万もするものだから。3 年計画とか 4 年計画とかで貯めてそれで買った。
私たちは囃子できる人たちを、ねぷた囃子ない時頼んできて、浅井で登山囃子の組があるんですよ。だから、そこから人を借りてきてねぷた囃子に代わって。だからねぷた囃子でなく登山囃子やって。昔からあったんだ、登山囃子と獅子舞は。ずっと前から頼んできているみたい。私たちやる前から。

T 氏の証言[i]
私が小学生、中学生頃までは、ねぶたの参加団体・町内は 20 台を超え、盛大なものでした。その後徐々に参加台数が減少し、5 台程にまで衰退した事もあったと記憶しています。私が子供の頃ですら、各町内会独自でねぶたを製作しているところは　ほぼ無く木造町（つがる市）のねぶた祭の後の物を買ってきたり、青森？のねぶた師に依頼したり、五所川原のねぶた制作屋（納豆屋）に依頼したりしていました。この納豆屋の製作能力が物凄く、スピード・技術・クオリティー、どれも高く、一ケ月程で 5 台以上　次から次へと製作していました。毎日のようにねぶた製作現場に見学に行っていた私は、その光景に驚きながら、じゃわめいでいました。木造町からのねぶたも、納豆屋のねぶたもほとんど前年かそれ以前の青森ねぶたのコピーです。著作権などうるさくない時代でしたから。下絵を描き、製作することは無かったです。祭が終われば、五所川原のねぶたはお盆に祭りをする、鶴田・板柳・鰺ヶ沢等に売られて行きました。
衰退していく祭をどうにかしようと思ってか？製作から運行まで自前で全てやろうと立ち上がったのが、「もつけ」「三振会」等でした。いつ頃からかは解りませんが、東芝とか市役所も自前ではありませんが、出陣するようになりました。

[i] 県外在住のため、文書で祭りの様子を答えていただいた。